

呐喊

4

個別闘争・帯域と

われわれの現在

'75夏

全国反帝戦線連合

呐喊

4

'75夏

全国反帝战线联合

呐喊 四号 目次

I

支援にとしての「争議」と支援にとしての「支援」…………… 畦倉 恭 …… 1

「過渡」としての労働者集会と政治的関与の位相…………… 有馬 直 …… 7

戦後労働 へ思想批判…………… 斎藤 治 …… 15

へたたかいの持続の根拠とは何か…………… 太刀川 守 …… 24

—— S工高闘争の総括 ——

II

学生運動の基準をめぐって…………… 坂本 直 …… 31

へ知的過程の自存的構造と大学批判…………… 藤田 浩 …… 35

大学像の解体と転向の根を撃て…………… 高見沢 洋 …… 40

へ跋…………… 55

かくめいへの越境

共産主義者同盟政治論文集 / 700円

想像力・創造力が衰退し、空想と願望に転落する時、実践と問題意識は文献引用と先験に一般的な危機の強調に墮落する。冷徹なる歴史的現実を直視し、日本革命運動における負的伝統「啓蒙主義—大衆主義」の閉塞的円環と訣別し、観念—生活諸力を「かくめい」へ至らせんとする営為は、即党派—分派闘争への火蓋であった苦汁な闘争のうちに獲得した綱領的視座・階級形成論、三甲塚・砂川沖縄闘争のうちに生じた「かくめい」への問題提起、党派—分派闘争の理論的諸問題

共産主義者同盟「叛旗」編集委員会

共産同盟理論機関紙

叛旗

第8号

FED. 1974

B5版 / ￥600

三里塚闘争の現段階

—我々は八戸村選挙を許さない!

—木の根叛旗現闘

早大闘争と学生運動焦眉の課題

—共産同学対部

資料

①早大學生運動の革命的再生に向けて烽火をあげよ — 西北地区反帝戦線早大班
②「フロンティア」特別号 — 同

ニチバン移転・諸闘争の総括

—斉藤 進治

「国家民衆共同性」の歴史像

—立花 薫

死すべき権力と共同性の行方

—神津 陽

再びわれら過渡期の途上にて

—三上 治

戦後革命運動の鞍部と拠点

—党派抗争と権力構想—

—三上 治

生活圏の変容とかくめい

—集团的疎外と日常価値—

—神津 陽

支配の危機と情勢の旋回軸

—インフレ闘争の前進のために—

—共産同政治局

叛旗

第9号

JUN. 1974

B5版 / ￥400

I
一、支援にとつての「争議」Vと支援にとつての「支援」V

一、「過渡」としての労働者集会と政治的関与の位相

一、戦后労働運動「思想」V批判

一、「たたかひ」Vの持続の根拠とは何か

— S工高闘争の総括 —

支援にとっての労働争議・支援に とっての支援

畦倉 恭

労働争議とは私たちにとってどのような意味をもっているだろうか。経済論や政治論で労働争議の価値を概略するのは手易いのかもれない。だがより本質的に労働争議を視ようとするなら、それが当事者や支援者にとってどのような意味をもっているのかからはじめるのが妥当である。とりわけ、支援者にとって「1」という位相での意味を押えることは重要である。

なぜならば、当事者のなかではごく自然のようにある連続性として像を結んでいる労働争議が、支援者という他者のなかで当事者と同じ単位で像を結んだり、意味構成をなすことはほぼありえないからである。このことについては当事者も、支援者も絶えず自覚的になければならない。

ここで私たちは「1」支援者Vの位相での労働争議の像について、労働争議支援者にとっての矛盾、次いで支援者といっても政治的労働者の個別的矛盾について触れてみよう。

1
少しも盛り上がることもなく、つものように、「敗北」に至った七五春闘をめぐり、いつになく総評内部での責任のなすりあいと顕在化している。いっぽう、いつものように闘争妥結前後の過程に必然化する「指導部へのつきあげ」は、いつになく全んどみられず、青年

労働者やまじめな組合活動者のエネルギーの所在が見えなくなりはじめているようにもみえる。「指導部のつきあげ」で自己の現存的位置を保持してきたかみえたものも、むしろ「つきあげ」で自己の現存性の核が見失なわれつつ他方で怨みが累積ばかりしてゆく風景である。

足もとから火がついているのだ。時間的な空間的な統覚を失っている支配的な現実と、伝統的な労働者解放の政治表現と幻想表出の統覚不能の事態のまえて、自己にとっての「現実」が構成できなくなっているのだ、といいかえてもよい。モチーフ、表現主題を喪失してもなお、指導責任のなすりあいや架空の政治的表現を絶叫している新旧左翼の笑えない悲喜劇のくりかえしには触れるまい。

押えるべきは、青年労働者や組合員個々の個体のモチーフも集団的なそれもあり、いまいであらざるをえないような共同の幻想の拡散と解体が、労働組合運動の内部にこれまでになく更に深く進行しているとともに、他方では日常的労働者運動を逸脱するかたちでの労働争議の多発と、それを支援し、共闘する位相での運動の契機の顕在化ないしは潜在化である。このことは象徴的なふたつことがらを示しているように思われる。

ひとつは、現在の労働争議の個々の展開はいわゆる上部団体官僚的組合組織と拮抗するか、独自の闘うかはずれにせよ表現へのモチーフをめぐって現存性の核を保持せんとしていることである。

いまひとつは労働争議は「喰えない」から発生するという古典的経済-政治概念で在るわけではなく、もっと別な意味で登場しているがゆえに日常的労働運動の領域につながる問題も持っていることである。逆説的というなら個々の労働者がある企業や職場で経済的

にへ喰ってゆけなく√なら別のところで喰ってゆくことはできるのだ。この位相では労働争議も日常的労働者運動も成立することがないように、別の位相で、別の意味でへたたかい√は構成されている。

経済社会構成上でのインフレーションが労働争議と支援運動を生みだしているわけではない。それが生みださせるものは、それまで流布されてきた労働者解放への観念、考え方のインフレ的性格である。使用価値に耐えない観念、理念の横行である。現存性を喪失したおもしろくないものだ。

支援という位相で登場する労働者はいちように自らの帰属する労働組合運動や職場の運動の在りようをへおもしろくない√ものと受感しつつ、労働争議に関与している。だが、だからといって一般的に労働争議が「おもしろいもの」であるわけではない。そう思うか思わないかは全く個人の問題でしかありえない。けれども労働争議に支援という位相でかわる個々の労働者の内部世界にへ場の選択√の意識が存在していることは、個人の問題一般に還元しえないのはいうまでもないことである。表現のへ場の選択√が労働争議支援という位相でたちあらわれる時代的労働運動の準位を問うことは個人の問題には収斂しえないからである。

労働争議は何故、支援―共闘を不可避に及び寄せるのだろうか。①労働争議は、日常的労働者運動がアトランダムにかかえている諸課題を、もっとも鮮明に、象徴的に具体的闘争課題として突きだす。争議の発端になる解雇問題や職能的差別問題、企業編成の改変 etc は単なる現象にしかすぎない。これらの現象を然らしめる諸矛盾とのたたかひの準位が波及性をもつ。

当体の個別的展開が不可避とする構想の共同性への形成へ過程√に存在している。この共同性が当事者にとって先験的に所有しうるものでないのと同様に、支援者は先験的にこの共同性に自らを組みこむことはできない。争議当事者にとっては当事者も支援者も等価であるには違いないが、「労働者」という意味での等価存在ではなく、この争議当体の展開過程が不可避とする共同性へ自己疎外せざるをえないという意味で等価なのであり、問題はその共同性に繰りこむ現存性の水準を争議から一歩離れた自己の境界でどう構成しているのかという点である。

たしかに支援者の日常構成の観念にある変容をもたらす労働争議はごくまれにしか存在していない。しかし他方で、労働争議の当事者の日常構成に交容を強いる支援運動もまたそれ以上に存在していない。私たちはこの後者の情況のなかの部分占めてはいるが、おそらくこの認識ぬきには誰も支援問題にこたえることはできないだろう。

2

労働争議支援をいかにしてゆくの、という問題でひんばんに起ることはその組織態をめぐる論争、次いで政治的諸問題への対応をめぐる論争である。

ほんらいならば労働争議支援の諸活動は、まず第一に争議当体の評価であり、その論議を踏まえての共同行動を巡る討議、論争、そしてスケジュール確定である。だが争議当事者の独自展開に対応するこれらの支援者の諸活動が構成される以前に、当事者のレベルで

②つまり労働争議当事者が（その個別的現象を打破せんとする目標課題が）内側にふくむ労働観念（個体的なものも協業的のものも）、言語―知性問題、対し家族（性）問題 etc を具体的な争議行為のなかでどのように扱っているのか。日常的職場闘争や組合運動ではほとんど不問に付されるか切捨てられているこの領域への不可避な踏み込みは、その切実さの度合いに応じて吸引性をもつ。

③そこで扱われている内容がどのような準位であれ、具象的なものへ転化され現在の組合運動の内部的壁へ問題を提起するものであるとき、支援者にある抽象的―具体的展開を迫る。

支援―共闘の存在は争議当事者がどのように急進的であろうとも、小規模であろうとも現象性に拠って左右されるものではない。支援や共闘の不可避性は、争議当事者が具象的展開の内部で構成する空間の時間化度、時間の空間化度を抽象的展開している度合いの問題である。つまり支援者にとってその労働争議がへおもしろい√ものであるときは、おそらくその労働争議の内的構成の具体的展開に裏打ちされ介在させた闘争―表現であるだろう。先験的な過去を止揚し、現存性へ繰りこもうとする能動性であるとともに、個人的に体现されるそうした闘争―表現への態度ともいえる。争議の個別性、個別的展開の内部で、どこまで闘争課題のふくむ諸問題―諸矛盾を日常的にとり出し、扱う水準を構成しえているのかという普遍性、いかにえれば構想力の問題である。

労働争議はその展開のなかでは時間性の空間化度の位相で支援共闘のへ大衆的契機√をよび寄せ、他方で空間性の時間化度の位相で支援―共闘の知的過程での契機をよびこむ。労働争議が波及性をもつとすれば、その個別利害の主張に吸引の核があるのではなく争議

の進行に自己同致してしまふ事態は支配的である。その理由は幾つかあろうが、私見では争議当事者の内部では自然に構成されているへ持続性√へ連続性√が、支援者にとってはへ自然√には構成されえない性格のものであること。支援者は当事者と準位の異なる持続性と連続性を独自に意識的に構成せねばならないこと。そして星の数ほどある現在の労働争議支援組織―集団はこのことにほとんど勝利していないと見受ける。

支援組織の停滞や不活発性は当事者―争議団の具体的展開の停滞に根拠をもっているわけではない。共同行動的側面からみればそのように言わざるをえない問題もあるのだが、本質的なものではなくない。労働争議団は、一見はたからみれば停滞のようにみえる情況にあっても自己の労働争議の過程的展開のうちに止揚されながら包摂されてゆく位相でのへ持続性√を対資本、対権力関係から強いられおり不可避にそれなりの連続性を構成しているものである。

問題はこのような位相で支援者はへ持続性√や連続性を集団的にもつことはない点であり、全く別な位相で構成―再構成するしかないことである。むしろ労働争議へのかかわりは当事者であれ、支援者であれへ恣意的√なものである点では全くかわらない。では何が異なるのか。

労働争議への当事者としてのかかわりでは自己の内部で自然過程として膨化し、政治化する観念の拡がりや個別的目標課題へ至る共同性の歯止めにより抽象的準位の想定範囲をもつ。（「全体の問題」とよばれる）このへ恣意的√への歯止めはあるへ自然性√である。つまり自然にそうしている。ここを離脱する観念は絶えずへ個人

問題として意味を構成するしかない。

支援者としての争議へのかかわりはこの自然性を当事者と同位相でもちえぬことにより異なるのである。「全体の問題」と「個人の問題」がある必然のように混同されてしまおうといつてもよい。「実践的」に「 ∇ 」といつても月数回の会議と限定された行動参加、つまり思想的にかかわる支援者の内部世界では、思想の ∇ 往相 ∇ ではどうあれ、 ∇ 還相 ∇ は恣意性によりおおきく個人的落差を生み出すのである。

この ∇ 還相 ∇ 、思想的行為の ∇ かえり ∇ の想定範囲をはっきりできなければ、支援組織の停滞は不可避なのであり、はっきりしていないぶんだけ他者に同致してしまっているのだ。争議団の個別的な過程的な展開から生みだされた ∇ 結果 ∇ としてのあれこれに自己同致することも、先験的な党派理念に自己同致することも思想本質としてはメダルの表と裏の關係にすぎないのである。むしろ争議のスケジュール的動員等にとっては前者のほうがよりよくみえるのかもしれないが、それはプラグマチズムとでもいうよりほかないであろう。生みだされた結果のあれこれが問題ではなく、過程的な展開のなかに止揚されながら包摂されてゆく位相での持続性を生みだす ∇ 構想 ∇ への洞察を欠落させることはできないのだ。

支援組織内部に「個人参加か組織参加か」の論争や、政治問題への対応論争が登場するときはこのような洞察を不問に付した結果としての組織の内在的危機が訪れていることを示していると思われる。いかえれば、この種の問題がもっともらしいかたちで論じられねばならないのだとすれば、何物かに自己同致するしかない支援者の内部世界の切実な問題を「個人の問題」として放置し、解き明すことなく後景に退けてきたことの反動以外の何物でもないだろう。

派利害の支援組織へのもちこみに対し「個人参加」や「組合参加」の場当りのな技術主義の対応ではない本質的自立の原則ではじき出しうるのである。

他者はどうあれ、私たちは私たちの支援者という位相での自己の、政治者の ∇ 場の選択 ∇ の問題として支援を問ひ返す。

労働争議過程においては日常的労働者運動と全んど変ることなく、そこでの矛盾の波及と収約が日常点検が可能な ∇ 価値的構成 ∇ を基軸にしている。他方、政治活動に關与し政治的に日常を構成する私たちは、幻想が幻想を産む ∇ 意味的構成 ∇ を基軸にして時間構成をなしている。

だが注意すべきことからは、この私たちの幻想が幻想を生み、抽象が抽象をよぶ ∇ 意味的構成 ∇ は、不可避な意識的過程を強いられてそれを経過した場合にのみ妥当性をもつという点である。この ∇ 意味的構成 ∇ の妥当性はひとつには経験の問題であるといえる。争議支援に關する私たちの意味的構成がある不鮮明さを有しているのだとすれば、それは労働争議当体の過程に形成されて展開されている ∇ 価値的構成 ∇ を抽象の想定範囲としてうまくひきよせえていないことに起因していると思われる。 ∇ 意味的構成 ∇ に ∇ 価値的構成 ∇ を ∇ かえり ∇ としてひきよせ不充分が生み出すところの、自己思想に還元すべき課題と社会的現実性の側へ回収されるべき課題の混同ということである。

私たちの ∇ 意味的構成 ∇ が妥当性を部分的にしかもたないような事態は他方で、私たち政治集団内部に累積されて在る構想自身をう

もともと組織型態上での「個人参加」を強調する部分は、知的過程での闘争へ自己疎外するしかない知的大衆であり、自己の組んでいる職場や日常的集団内關係に於いてそうせざるをえない個別的事情を背景にしている。

また「組織参加+組合参加」を主張する部分は、自然発生的な生活過程での闘争へ自己疎外するしかない契機を抱える自己の単組や職場闘争が上部団体等々の日常的集団關係に於てそうせざるをえない個別的事情に根拠をもっているのだといえる。

支援者が個々のに有する現象としての個別的事情を結集基準や組織型態の問題の基底に据えることはできない。(會議の構成基準はあくまでも個人単位であるのは自明だが、會議構成と組織型態は同一でない。)現象としての個別的事情はそれを抱えるしかない当人の切実さの側から解かれるのではなく、その事態を強いている幻想の共同性を迫いつめてゆく構想の側から解かれねばならない。そうしなければ現象としての個別性は個々の問題として、個人的領域に収斂されるべきものとして葬り去られてしまふほかないのである。

私たちは支援者組織の型態が「かくあるべきだ」といおうとしていっているのではない。支援者の内在性が千差万別なものである以上、そのことをよく踏まえて組織が構成されているなら、それは肯定も否定も口をさしはさむべきものではない。ただ右にみた自覚は何にもまして実践的な判断の展開のなかで労働過程での共通利害を基盤とする自立性を問題にし、その自立性を侵蝕する家族的な問題や政治的要素をはじき出す。はじき出すことによって真の相互關係をたてようとする。支援者もこのことに自覚的ならば、つまらない党

まく思想の先行性としてつかみだしていかないという点に起因しているように思われる。私たちにどって支援者の有する個別的事情があるとするればそれはこの問題領域に他ならない。 ∇ 意味的構成 ∇ を時間的に成立させる労苦なしに ∇ 価値的構成 ∇ をひきよせることはないのである。

私たちが有する労働争議に關るか關らないかの判断はその労働争議の有する価値的構成度合に起因しているようにみえても、軸は私たちの ∇ 意味的構成 ∇ の準位にある。ここを外して私たちの ∇ 場の選択 ∇ としての労働争議支援の像は結びえないのだ。

これまで現闘団という呼びかたで砂川闘争や三里塚闘争等に関り、争議支援を展開してこるなかで「大衆にならなければ価値的構成は了解できないのではないか」「支援を推進しえないのではないか」という疑問にさいなまれてきたことは疑いえない。価値的構成に私たちの意味的構成内容がとどかないことの苦しさであった。しかし、たとえば革命家が自らの貧困としかしいようなない経済的生活から世界経済を論じえないように、私たちに自らの具象的经验一般から意味的構成が訪れないことは自明である。

私たちが価値的構成にとどいていない部分をもっているとすればそれは個々の労働争議の課題に包括され、現象する性 ∇ 労働 ∇ 言語の諸過程としての人間の对象的行為が ∇ 關係の構造 ∇ としてあらわれる位相 ∇ たとえば家族問題や労働過程の矛盾、知的水準etc.を徹底的に解析、析出してゆく作業をはじめたばかりであるという点に負っている。また、そのような行為をすぐれた ∇ 政治表現 ∇ としてみなしてゆく政治実践概念によりやく辿りついたのだという個別

的事情に拠っている。古典的な政治表現論への異和をいいつつも、それを止揚する実践性の基準を私たちの意味的構成の水準がよりやうく手に入ればはじめたのだといいかえてもよい。

なぜこのように「意味的構成」の問題にこだわるのか。それはまず現在いかなる意味においても支援者の位相で登場している政治的党派、知的部分は例外なくこの問題を不問に付すか、先験性でしかとらえ得ていないからでもある。当事者の内部で生起する支援者にとって意味不明のことがらに對し、「何故に意味がわからないのか」と問題をつきつめること以外、支援者にとって了解のとはぐちば存在しえない。情報のあれこれを集めても当事者とは異なる連続性を自らの日常構成のうちにもたなければ、判断や了解は決ってやっとなない。

支援の政治的党派構成員や知的大衆は自らの持続性、連続性をつまびらやかに問われている諸矛盾との関連で提出するようにしなれば、支援主体の持続性や連続性は問われることなく流通する支配的現実のまえにぶざまに追隨するしかないからだ。そして当事者の持続性に自己同致するところを無自覚に逸脱し個別的労働争議の妨害物に容易になり果てている風景を私たちは数多く眼のあたりで見ているのだ。

支援者にとっての現実はその支援者のもつ幻想構成の別の謂である。私たちは私たちの支援者の位相がどのような現実としてたちあらわれているかをよく知っているつもりである。私たちは幻想からはじめ、幻想の問題として一切を扱う。現実とは私たちにとってそのようなものである。私たちはこのような自覚を態度として押し出すとともに、これまでそうしてきたように、矛盾の指摘がその止揚

△地区▽労働者政治結合の△過渡▽的展開について

有馬 真

(1) はじめに

私たちは現在、地区的な労働者の討論集会を継続的に展開している。そしてこの集会が現下の状況から私たちが強いられることにおいて不可避であると同時に私たちの意志の所産であるとも私たちは自覚している。

この間私たちは、現実に関与しようとする程私たちの現実を喪失していくかの感を禁じえないし、それは常にどこかで私たちの政治理念の構成が集団としてあやういのではないのか、また身体行為そのものが封殺されている、という感性から自由でなく、このことは政治革命をなそうとする私たちにとってきわめて切実なものである。

そして現下のインフレと不況の共存による生活日常の根底的な△危機▽が激成され、階級矛盾が累積しているにもかかわらず、今春斗の結果に露呈された通り既存の労組が国家や企業の共同規範へのとめり込んでいく基部において労働者・大衆は圧倒的に△沈黙▽を積層させており、他方私たちは政治実践の側においてもその階級矛盾に総体的に抗する回路を共同幻想の構成転換の問題としてうま△判断▽を構成しえていないし、政治実践の主體的なイメージや環を確定しえていない事も確かである。

の契機への第一歩であるという立場を徹底してゆく。これが労働争議支援をなす私たちの側での持続性―連続性の核を構成するであろうことは疑いえない。

だが、私たちがもしも労働争議を自らの意味的構成にひきよせえていないことがあるとすれば、たまたまいが不可避に生み出す争議主体の△シン・テーゼ▽をよくひきよせえていないことをさし示している。大衆の流動を政治的にとらえる唯一のキーワードは、大衆の表現の結果的な△アンチ・テーゼ▽を価値づけたり、それに評価をおこなうことのなかからは見出しえない。大衆闘争や労働争議の持続性はそこでの△アンチ・テーゼ▽の表現のなかにはなく、他者が視ようところがあれば必ずみとれる△シン・テーゼ▽のなかにその核を有しているのだから。

このような欠陥を私たちが不可避としているのだとすればそれは観念の自然発生性をよく止揚しえていないことを意味しているが、それはまず、思想的抽象対象に思想が下降していかないのだという自覚、私たちの幻想が現実をあいまいにしか把握していかないのだという自覚から克服する以外ない。私たちにあってはこのような意味で幻想が、思想がその在りように於いて徹底的に問われるものとして位置を有している。マルクスではないが、「人は何を考えているのかとは別に、何をなしているから社会的規定を受けとる」のであり私たちはこうした試行錯誤を冷徹に見据えつつ更なる一歩を定めるにはここでこの苦戦を、すぐれて政治実践的行為として深化するであろう。私たちが△場の選択▽とした労働争議支援はどのような意味でも政治的実践の位相にあるからである。

一九七五・六・一七

私たちはかかる状況において私たちが意志する労働者集会に私たちが何をこめ、何が可能であって何が可能でないかと想定されるのかと再度自問し、状況を私たちの主体の側へ引寄せ、あたりかぎり私たちの環界世界が強いてくる現在の不可避性とそれへの判断構成を、私たちの意志を介して実践のイメージへと結実させていきたいと考える。

(2) △反インフレ行動▽の経験判断

私たちはニクソン声明以来の構造的インフレの激発に對し、日本の戦後社会・経済編成の總体的な構成転換以外にはこのインフレ矛盾を解きえないものと考え、△反インフレ行動▽を提起してきた。

しかしながら、この△反インフレ行動▽はある核心的な問題において後退せざるをえなかった。それは現象的にはインフレ矛盾が大衆の生活価値破壊を累積させながらも、大衆は自らの生活過程にたまたかいを△表現▽することもなく、無惨な日常を△沈黙▽でくいつぶしていたことであって、私たちが△反インフレ行動▽をなせば、インフレ矛盾が深刻である以上、大衆のたまたかいへの内発力は運動表現されるにちがいないという判断が外れるという形として現出した。

私たちはこの経験を内省するに従い、次のことを把握することが可能となった。

つまり私たちの政治主体の側にあつては、政治表現としての△反インフレ▽とは何であるのか、インフレの根拠は奈辺にあるのかへの組織的な判断構成がうまくなしえていないのではないか、更に旧来の△情勢―戦略―戦術▽のワンセット構造による政治（理念―運

動一組織)に私たちは依然として訣別しえておらず、大衆の「生活」をめぐる観念の時代的あり方を私たちの政治にくり込むことが抽象力においてなしていないのではないのか、という事である。

そして他方で、私たちの情勢の「危機」は、日本の政治思想が幻想において「自立」しえていないという歴史性から自由でないと同時に、その自由でないことの根拠にはおそらく日本の大衆の「生活」思想の表出構造のある特有なる歴史的構造があるにちがいないという思いであった。このような内省から私たちは政治思想の歴史的水準の全面的な再検討、つまり政治集団の共同性そのものの構成転換として状況を主体化しようと志ざしてきたし、そのための方途として大衆の「生活」表現の総体的な幻想構造への判断を徹底して構成していかうとしてきたし、今後も持続と深化をなす以外にない。

「反インフレ行動」で私たちがぶち当たった時代的壁とはインフレの生活価値破壊に対応する大衆の「沈黙」そのものであったといふことができる。そしてこのことは私たちにより根底的な生活日常における大衆「像」の判断を強いた。

何故大衆は生活価値破壊に抗する表現をなさないのでか、何故なれないのか、という疑問は今も極めて切実である。

私たちがかかる大衆の「沈黙」の幻想構造を、私たち自身の生活の内省と大衆の「表現されたもの」への類推とから把握しえたのは、日本の社会においては「大衆」のあり方として、生活日常の外側からやってくる事態に対してはその幻想過程の対応において、従来の「左翼的」な「階級斗争」の高揚と停滞という経験的なパターン思考を無効としてしまふ「敗北」の構造「としかいいようのない大衆の生活をめぐる幻想の構造がある」という事に外ならない。それは十年、二十年

のサイクルとしては絶対に解けないある累積の構造ということもできる。

革命が大衆の手になる事業であることを了解すれば、ある時代の総体的な共同幻想の構成転換をなさんとする政治は、このような大衆の幻想構造を否定的な媒介としてその理念「運動」組織にくり込み、大衆の「表現されたもの」を「表現されないもの」への判断を組織的になす以外にない。

では、大衆の「表現されたもの」は、この「敗北」の構造を照明するいかなる矛盾を露呈しているのであるか。

(3) 大衆の敗北構造とその現在性

私たちが政治の側で「反インフレ行動」を想定した時、インフレの激成による生活破壊に抗するかのようには発現された大衆の「表現」は、現象的には労働者斗争の「春斗」方式を介してのみ可能とされ、その理念的象徴が「国民春斗」であった。

この「国民春斗」を歴史的な日本の国家「社会」編成の側で客観視する場合、この「国民春斗」はふたつの別異の位相の内容がはらまれていたはずである。労組連合としての「春斗」共闘委が「国民的斗争」政治革新として語ったものの本質と、労働者大衆が自らの生活危機へ対応するために賃金問題として表わした「賃金斗争」国民的支持「と」いうものの本質とである。

つまり前者においてはインフレの激成が階級矛盾として総体的な共同幻想の構成転換として解決される以外にないという政治国家の水準において、従来個別賃金斗争の連合としての枠組しか有していない「春斗」共闘が、情勢の水圧に押し上げられてかかる政治性を担う

ものとして、内容的には「政治革新」選挙「運動」的には「セネスト」実力斗争「と」して発現された事であり、これ自体極めて矛盾ではないことは自明のことである。

個別的であることによつてしか、そして現在の具体的な課題を担う当事者斗争であることによつてしか普遍性を獲得しえない生活の側に拠を置く労働者大衆のたたかいが、自体的に普遍的であることを強いられる政治国家水準のたたかいを担いようと想定することはすでに虚妄でしかない。

この虚妄は、いわゆる「国民春斗」の経過をみれば明白である。弱者救済も、社会保障も、そして最賃制もふつとび、個別企業「労働」組の賃金をめぐる攻防へと収約されていったことがその査証である。そして後者の労働者、大衆が唯一人も本気にしていない弱者救済とか「国民」の理念を付与しない限り、労働者として当然のことである賃金斗争ひとつなしえない労働者の運動とはたして何であるのか。すれば労働者大衆が「労働」生活「過程」の側から当然の利害をめぐって斗争を「表現」する時、「国民」という理念を不可避的に身にまとうとはたして何であるのか。

私たちは日本の仮構としての「労働者運動」が直接地統的に当事者斗争としての個別労働者の斗争を統括する構造において「政治」が想定されていることに対応して、個別斗争も、どこかで「政治」理念を介在させずには自らの斗争の展開もなしえないという「公的」なるもの「と」私的なるもの「の」解かれることのない閉塞的な円環構造を見ることができるのである。

この円環構造のインフレ矛盾を介しての発現を、日本の戦後性という歴史軸へ写像した場合、高度経済成長下でのみ可能であった

「生産性理念」の組合的あり方としての「春斗」構造「の」解体と呼ぶことも可能である。このことを市民社会の大衆の成熟史として抽象すれば、戦後社会において私たちが唯一プラスの契機として評価すべきものとして想定した「生活第一主義」、「私生活優先」とかの大衆の生活感及び観念が、その成熟において国家なる共同幻想を相対化させ、それに対応して国家が大衆の生活日常を統括する幻想力を衰退させてきたにもかかわらず、大衆は依然として国家の共同幻想の構成を転換せしめるに足る大衆の共同性を形成しえていないし、私的性という私的利害なり恣意的自由なりも大衆の表出の構造において依然として国家の共同幻想の側へと向かっていると把握することができると。

私たちは今「春斗」の経過とその内容から「敗北」の構造「と」しかいいようのない大衆の幻想構造の歴史的累積の現在性を判断することにより、その「公共性」「と」私的性「の」円環構造の煮つくりとしての準位を確定しておく必要があるだろう。概略的には、今「春斗」の理念的象徴として存在した「最賃制」に表出されている通り「国民的斗争」政治革新「と」して仮構されている労働者斗争が、その理念性において、インフレ・不況の経済社会構成の総体的転換へと迫る政治を徹底して構想することもなく、労働者大衆自身を社会的弱者と想定し、この弱者の生活過程を国家に保護・管理させようとする水準へと転位しており、他方で労働者大衆の圧倒的部分は個別企業労働者の位相で生活防衛を「企業防衛」の大義へとすべり込ませ、はつきりと、「公共性」優位の観念構造の位相へと転位したのであり、そしてたまたわんとする労働者は、徹底した孤立を強いられているのである。

ここには△最賃制▽が現実的有効性のレベルで完全に破産しながらも、思想的に、つまり幻想構成の時代性において是非とも留意せねばならない内容がはらまれている。それは戦後社会において国家としての国家の共同幻想がその国民的統括力を衰退させてきたことに見合い、経済社会構成の現在の矛盾を介して行政・規範的国家が裸形的に前面化し、ますます把大化してきており、この事に相即して△行政の民主化▽により生活過程の諸矛盾の救済と統括を行なうてきたことであり、にもかかわらず労働者大衆の△表現されたもの▽はこの規範国家理念を介させつつこの国家の水準へは自己の像をむすぶことがなく、△労働▽を介して企業の経済共同体幻想へと△企業が倒産したら食えない▽ものとして自己の生活観念を同致させていったことである。

△企業が倒産したら食えない▽理念・幻想は、△私的なるもの▽と△公的なるもの▽との円環構造の生活日常へ引寄せられたあり方を如実に示しており、その限りで時代はいきつくとこまでいきついているのである。

このあり方は、△労働▽の自然的不可避性と現実過程との乗離関係の内に△経済共同体幻想▽や△公共規範性▽を介在させることによりその関係を統括せんとする△観念▽が表出されており、このことは逆からいえばそのように幻想や規範性を介在させることによつてしか統括が可能でないという現下の△労働▽をめぐる観念の水準が反映されているという事である。

従つて私たちに必要なことは、△経済共同体幻想▽を介在させることによつてしか日常生活過程を統括しえない現下の幻想構成の水準に従つて当然のこととしてこれら政治諸党派は、ますますその実践において混乱を極めており、ある部分は古典的な政治概念へと回帰し、革共同両派の内ゲバ、春斗への党派の逃げ込み、反差別、第三世界への自己移入等々としてその発現は多岐にわたる。

これら諸派には、現下の日本の諸実践がぶちあたっている根底的な壁を判断することもできなければ、階級矛盾としてのインフレを判断することもできないのだ。彼らが戦後日本の大衆の幻想構成の総体へと迫りえず、国家の共同幻想の時代的変容にも無知であることは自明である。

だが、冷徹にみれば、私たち自身が依然として旧来の古典的政治概念、階級概念とうまく訣別しえていないことも確かであると思われる。

私たちの情動的な困難性とは、先にものべた様に構造的インフレの階級矛盾の累積への拮抗をなすに当り、旧来の政治の△情勢△戦略△戦術▽のパターンでは一切が不可能であることを了解しつつも、大衆の全幻想構成の抽象力による政治理念△日常への繰り込みが必須であると了解しつつも、どこかでこのことを徴在して判断することが困難であるという感性のうちにある。

この困難さは何よりも組織△集団問題として表出されてきている。おそらくこれは△政治▽の本質に関わることであり、私たちは本質的なところで再度思想を深化していくことが要請されている。つまり情況の核心を敵へと迫るためには、情況自体の側でなく、こちら側の集団問題として常に解かれねばならないということである。

私たちは、インフレ矛盾の激成する現下の時代情況へと肉迫する

準は、共同幻想の時代的な発現様式として了解されねばならない事であり、それは国家の幻想的統括力が衰退し、行政権力が把大化するという形において歴史的に累積された共同幻想が、日常圏にへばりつくことによりはじめて国家が存立しているという逆倒した構造が発現しているという事である。

このことを了解すれば、政治実践においても、社会過程での実践においても、異常に苛酷としかいいようのない道行がみえるはずである。

(4) 政治実践の△危機▽と転換

情勢への立体的な実践イメージ、環が確定しえないということにおいて私たちの政治実践は△危機▽として現実的である。

私たちが構成する政治思想は時代的な共同幻想に拘束され、具体的に展開する政治日常は、つまり集団編成のあり方は具体的に大衆がとり持つ社会的な生活日常、家族△地域△地域という共同編成の水準に拘束されている。これは不可避であり、自然的な過程でもある。

確かに私たちは革命の構想においてこの不可避性を前提としなければならぬが、総体的な共同幻想の構成転換をなすという限りにおいて、私たちはこの自然的過程を否定的媒介とすること、その回路が問われている。

日共や社会党の、総じて構改諸派は、戦後の時代的な自然的過程に直接革命を想定し、他方で中核、革マル両派、共産同諸派はこの自然性の外側で△反スタ▽、△人民戦争▽などの宗教的な理念を中軸とした位相でのみ革命を構想しようというのである。

方途として現在次のように考えている。より抽象的にいえば、構改思想でも、しいては農本思想でも絶体に回答しえない階級矛盾に対し総体的な共同幻想の構成転換として回答していくという徹底した政治（理念△運動△組織）の強化以外にない。そしてその内容は、ひとつには現在生起している社会的諸領域の斗争の内容をこちら側の政治へと思想的に繰り込む事である。このことは決して大衆運動主義や経験一般のためには決してない。国家としての共同幻想がますます衰退し、拡散する一方で日常圏に歴史累積としての共同幻想がへばりつくという時代水準の中で、日常的な非幻想域に拠を置く大衆の斗争の過程で、大衆の△表現されたもの▽と△表現されないもの▽の総体をめぐる大衆の全幻想構成を抽象するということが外ならない。

このことは△時代▽を超える政治実践の主體的イメージの創出に向けて不可避である。

そしてかかる作業を意志的になすことを通じて、インフレ、部落、天皇制問題に象徴される情勢のより明確な把握と、大衆の幻想構成の連続性と変容過程に対する抽象であり、これがふたつめである。

このふたつの回路は、私たちの政治の連続性の側においては、私たちが諸実践で累積させてきた三里塚、砂川斗争、反戦青年委、反インフレ行動等の再検討を常に並存させることによつてのみ血肉化しえる。つまり集団論△組織論へとしぼり込むことが私たちの要である。

しかしして私たちは思想・幻想において△自立▽へと大胆な歩みを意志する。その所産の具体化が現在の地区的な労働者の討論集会有る。

そしてこの集会は、現在の私たちの政治集団の側からの設定であること、つまり私たちの一方的な設定であること、が時代への本質的な抵抗の唯一のとりえる最前線であるだろう。この点で都労活、全労活とは決定的に別異なのだ。

(5) 労働者集会の軸心と政治的関与の位相

労働者集会のいくつかの基本的枠組みにふれておきたい。次のことは周知である。

私たちが労働者集会をいかに活発に展開しようが、いかに継続しようが、そこには政治実践の根拠は全くないし、逆に参加する労働者の側からみれば、自らの労働生活の諸矛盾への回答を具体的になしえる根拠はこの集会には存在しないし、私たち政治集団が労働者の斗争を代行することは不可能である。

確かに討論形成という準位においては労働者であろうが、政治主体であろうが無関係に等価である。

ここで△等価△であるとはこの集会の軸心に関わることである。

すなわち、私たちは、討論会の参加主体が政治思想の抽象性レベルでもなく、個別領域の非幻想領域の具体性そのものでもなく、大衆の△生活△観念、大衆の△表現△の観念、政治幻想、その他の全ての幻想構成の総体を扱うという限りにおいて等価であると考える。幻想構成の総体を扱うときの現実的とかかりが△労働者△という社会的定在を呼び寄せたにすぎないのである。

換言すれば、職域・労働過程を中心とする日常性の中で不断に労働者の△私私性△が△公公性△としての規範に収奪されていくという時代水準に到達しつつも、既存の労組がこれに抗する理念性を有

ことを通して私たちは個別域に対する抽象と、当該労働者の自己の抽象の回路と構造を判断していく契機が存在するにちがいない。

このことは政治集団の個別域へ関与する部分、個別域の当該でもある部分、一切個別域への関与をなしていない部分との関係の構造の解析をなす回路として私たちに獲得すべき内容である。

唯私たちは、ここでは私たちの労働者集会への関与の位相が、つとめて思想的であること、この集会を、実体的な集団として想定することはすでに△敗北△であることに深く自覚的でありたい。

このことは私たちの労働者討論集会に限定されることなく、政治集団の個別斗争への関与の位相において普遍的なことである。労働者討論会における当該支援関係、公害、地域住民斗争における当事者支援者関係も本質的にこのように想定しぬいていくことが私たちに必須である。

私たちはこのことに自覚的でないだめな例の典型として部落問題への諸政治党派の関与と、都労活、全労活への党派及び労働者部分の関与のあり方と内容においてみる事ができる。差別反対斗争では党派は△政治△的であるという仮構に、労活では党派は△労働者△的であるという仮構にちよっと触れたというだけである。根底的にかなるものも回答していないことは極めて自然である。

(6) △公共性△をめぐっての判断

私たちはこの間の討論の内容からいくつかの問題点をのべておきたい。

参加労働者の側から民間企業における△企業存続△への労働者の観念の同致と、公務員、大学職員における△公務△ないしは△サー

していないという大衆の関係性が解体的な危機にあり、従来それらを統括する枠組みとしてあった△労組共同性△が衰退し、その度合いだけ規範へと転化し、擬制として現存しているという状況の中でそれに拮抗する思想を討論主体が相互に織りなすことこそがこの討論集会の軸心であるのだ。

だが△等価△であるとしても、その集会への関与の位相において、又関与の根拠において政治集団の構成員と個別的領域の労働者とは全く別異なのである。つまり討論主体が討論という作業を通してある△思想△を抽出していく径路と、その△思想△を自己へと帰していく環路との観念の回路において別異であるということである。もちろん、だとしたとしても、核心において異ならないはずである。それがつとめて時代的な現在性である限りにおいて。

両者は、共同幻想変容、連続性と個別的に現在の生起する大衆の幻想との交点にある△現実△に執着しているからである。

では、政治集団としての私たちの側からは往環の回路はどのように想定されるのか。私たちは労働過程の、そして労働者斗争の個別域からいくつも全く無関係のように生起してくる大衆の△労働生活△をめぐる幻想構造をひとつには歴史軸の側から大衆の成熟史として、つまり△階級の形成△の問題として、ふたつめには現在の関係の側から大衆の△表現△の関係を徹底して判断することが、そして労働者と相互に織りなした△思想△を政治(理念)運動(組織)の側へ繰り込むことが、その回路であると想定している。

そしてこの返り目には、私たちが個別域の労働者の一部分と思想的な関係を結ぶことになり、当然主体の位相差に応じて相互の異和は煮つまっていくが、その際に私たちがこの異和を厳密に解析する

△をめぐっての問題の提起があった。そして私たちは端初的にかかる問題はどのように解かれるのかと問われた。

私たちは、かかる提起の問題は△公共性△をめぐる幻想構成への判断の困難さであると了解した。そのことで次の討論会を持った。だが、今度は労働者の側から△公共性△なる概念が把握しえないという概念の問題として疑念が提示されてきた。

私たちの経験は極めて少い。だが、これだけの推移の内にも△世界は凝縮△している。要約すればおよそ次のごとくに課題は抽出される。

- 討論参加労働者は圧倒的に自らの個別領域の諸困難を解いていく理念ないしは方途を私たちに回答することを求めている。
- 当該労働者の問題提起にある概念へと抽象する時に、私たちは早急であったし、このことは、概念形成のためのいくつかの手續の解明を私たちに強いている。
- 労働者という社会的規定を刻印されつつも、討論参加労働者にはふたつの部分、つまり組合運動ないしは個別斗争をかかえこみ、それを拠として討論に関与する部分と、それとは相対的に無関係により自己思想の抽象性をもつばらの拠として討論に関与する部分、が存在し、この構成で集会をなしていくには相互解のある構造が必要とされている。
- 最後に、私たち自身における政治集団の△組織的△なる判断構成が、△公共性△概念の提出に当り、あまりうまくないなかつたこと、この根拠への判断が必要とされているし、その

△公共性△概念の再検討の必要性が存在する。このように要約することは決して強引ではないにちがいない。

△公共性▽概念をめぐっての私たちの判断とは、労働者大衆が△企業
の倒産に食っていけない▽という観念と、行政国家の肥大化を支
えている大衆の幻想構成のあり方は、何よりも共同幻想の発現様式
であるとするところに基礎づけられていた。その発現様式を総称し
て△公共性▽と規定したと考える。

だが、当該労働者は、自らの課題からみてこの△公共性▽なる概
念に異和を感じたのである。このことは当然のことであるだろう。
というのは、私たちは討論会において個別性の差異を徹在してつき
合せ、そこでの普遍性を煮つめるという作業を欠落させていたし、
このことに対応して労働者は個別性への自己判断が△公共性▽へと
抽象される時の抽象の回路が存在しなかつたからである。時代に抗
する△思想▽を相互に織りなすとはあまりに苛酷であり、私たちは
ひとつひとつ△了解▽判断▽してにじるを寄る以外にないのだ。

従って、私たちは前提的に当該者に個別域がかかえこむ諸困難を
徹底して語らせることであり、幻想の側での抽象作業をなさしめる
ことが必須であると考えるのである。

例えば△公務員▽をめぐっての諸困難や公務員労働者斗争の諸矛
盾は、決して△公共性▽へと要約されないであろう。そこでは何よ
りも公務労働の禁制として、そして労組のこのことへの黙契として
現実的であるはずである。

この禁制も、現象的には民間労働者のそれとは徹底的に差異性と
して発現しているし、国家公務員と地方公務員とはまた差異的で
ある以外にない。だからこそこれらの諸差異性の煮つめことが討論
集会の生命である。

「労働運動思想」批判（そのI）

斎藤進治

（一）労働運動思想を構想する基礎概念について

わたしたちは、思想上の間違いであれ、現実上のそれであれ、
労働運動をある個別で限定されたある局所において（「企業共同体
」編成の過渡的累積水準にたいして）徹底的に行使しようとおもえ
ば、それにもっとも障壁になつてしまふのは資本、経営の強固な実
体的な壁でもなければ権力の横暴な壁でもない。強いて表現するな
らば徹底化してしまふことによつて必然的に生じてくる労働者組織
の各々の生活上、家族上の諸矛盾の緊迫性、焦燥感をとことん最後
まで現実上のものにしてしまふまで、そのような労働運動を徹底化
しうる思想的根拠があるのだろうか、そしてそのことを各々の労働
者が自己統括しうるような思想的根拠をみつげだすことができるの
であろうか、という素朴な問いである。

単純にいえば、ある社会的な局所における労働運動はどのよう
にころがったところでも、そのくみではいかかというのである。
ある「企業共同体」内部における諸矛盾を解消しうる闘争がいつの
まにかあらたな苛酷な諸矛盾の累積に変質してしまふ。そしてこの
累積を解消しうる闘争がはたして、この社会的な局所における闘争
自体の内部領域でのみ可能であるのだろうか。
このような素朴な問いにたいする解答は、これこそこれまで左翼

ちが思想的になすという場合、このことは決して私たちの語りばな
しという一方交通を意味してはいないはずであり、当該労働者の拠
する個別現在性を、歴史性へと相対化し、再度現在性へと環流させ
るといふ抽象的作業こそが私たちの関与の位相構造である。

公務員労働をめぐる禁制、黙契も、それ自体歴史的に累積された
水準を有しており、この累積の連続性・変容は徹底して共同幻想の
問題なのである。だからこそ私たちは可能を限りとことん個別事象
の諸問題の差異性、差別性を判断していく必要があるのだ。

だが△公共性▽問題に象徴された当該労働者と私たちの間の観念
・思想交通のちぐはぐさは、当該労働者自身の側の矛盾としてもそ
の根拠があるといえる。それは、彼らが私たちに直接的に回答を求
めることに表出されている。

確かに私たちは思想的に回答せねばならない。しかしながら、彼
らが自らの領域における思想的抽象化を放棄しているとしたら、や
はり、日本の大衆の△敗北の構造▽の突破の途はない。

私たちは彼らに語ることを強いる必要があるのだ。

赤色労働組合主義も、政党による労組の分裂という的なるあり
方ひとつをみても、私たちは△自立▽とはとつてもないことを再度
再度知る以外にない。

私たちは幾多の問題をかかえている。そして私たちは私たちの政
治（理念→運動→組織）に革命の現実性を引寄せんとしている。現
在的に展開している労働者討論集会自体の内的な幻想構造について
は新たに触れる機会が必ず存在するだろう。いや存在させねばな
らない。討論集会への前提しか述べることができなかったが、今後
の方途に期するところである。

（了）

イデオロギーから右翼にいたるまでそれらは多種多様な思想的なサ
ンプルが「用意されている」といおう自己主張している。たとえ
ば、ブルジョワ国家から政治権力を奪取しプロレタリア独裁、労働
者独裁を貫徹するまでは、いくら社会的な局所における労働運動を
展開してもナンセンスであり、まず政治的権力闘争を第一義とすべ
きだというのを一方の極とすれば、「企業共同体」を労働者が自主
的に管理して生産中枢をにぎり、そしてそのような工場管理を全国
的、全世界的につみあげていって、その延長線上に革命像を形成し
ようというサンジカの傾向をもう一方の極として、そのあいだには
さまざまな折衷案、調和案の構成段階をもふくめて、豊富な歴史的
な遺産が現在においても再生産されている。

しかしながら、わたしたちがここでやろうとしている「労働運動
思想」批判は、そのような古典的論理とは方法的にもまったく異質
であるし転倒さえしている。まずなによりも最初にあげた労働運動
の現実的な指導者層、活動家層にいつも執拗につきまといっている根
柢的な諸矛盾を解消するために、つねに他の領域（最上位の共同体
的思想）に身柄をあずけることによつて解消するのではなくて、ま
さしくそれ自体としての、その固有の領域のもんだいとして労働運
動思想を構想してみることができないかということである。いかに
してもっとも素朴でかつ本質的な問いにこたえられるのがわたし
たちの基本的な態度である。

「労働運動思想」批判の基本軸は、資本制生産様式の展開によつ
て不可避に「労働」「労働一般」概念として自体的に抽象化された
経済的側面を媒介項、結節点としてどこまで「労働」「労働一般」

を客観的に個体原理として、対的原理や共同体的原理とは相対的独自に根拠づけるかどうかであり、ここではおそらく経済的側面からの抽象化されたものが「労働」「労働一般」概念を最終的に個体原理として措定し、かつ具体的な社会的現実のなかでどのような価値観の水準として表現されるのかがもんだいになってくるであろう。他方、最上位的共同体としての国家編成と不可避に規定づけられた「企業」「企業共同体」(あるいはもっと広義には労働の行使される協働的な場面性、それによって労働行為の幅は「企業」枠をとりはらってあらゆる「労働協働体」に適應されるだろう)にまで抽象化され、かつ社会的現実構成として表現されている歴史的、過渡的、情動的な共同体的側面、共同観念的側面(「企業共同体」内における経済的人格としての株主、資本家、経営者、労働者の諸関係もふくめて)をそれ固有の領域のもんだいとして、どこまで労働者大衆の個別的な労働意識、労働観念の時間構成の自己統括力によって、「企業共同体」的側面を時間軸の側から相対化、部分化しうるかどうかである。このような二重構造をどのように労働運動思想のなかにくりこんでゆけるかである。

おそらくこのような基本的な批判軸を設定しないことには、労働運動思想の構想といってもある特定の党派的な労働者中央組織体の理念か、あるいは「民主主義」とか「社会主義」とか「階級的」とか「協調主義」とかなどのなにやらわかつたようなわからないような名辞を冠することによってしか計測しえなくなってしまうだろう。わたしたちのあらたな労働運動思想の構想も、このようなあらゆる古典的理念を粉碎し、止揚することによってしか一步をふみだすことはできない。まず、「労働」「労働一般」として抽象化されて

資本家に人格化された価値に對立して、ないしは労働諸条件に對立して現れる。所有と労働のあいだの、生きた労働力能とその実現の条件のあいだの、対象化された労働と生きた労働のあいだの、価値と価値を創造する活動のあいだの、こうした分裂——したがってまた労働の内容の労働者自身にたいする無縁性——こうした分離は、いまや同じく労働それ自身の生産物として、労働自身の諸契機の対象化、客体化として現れる。」(マルクス「同右」)

ここでマルクスが経済学的に指摘している論理を、わたしたちのもんだい意識に引きつけたかたちで、くりこみつつ、再構成してみよう。マルクスが資本制生産様式に価値増殖過程の時代的現実とそれらの抽象的考察において、個体原理としてのみ強いられる「労働」概念が経済的側面においては窮極的にはどこまでいってしまうのかを、追いつめられてしまいかを、あるたしかな原像として提起しているが、この資本制によって圧迫された経済的像をより個体原理の側から本質的に再措定してみたいとおもう。

「労働はまず第一に、人間と自然とのあいだの一過程である。すなわち、人間がその自然との物質代謝を、彼自身の行為によって媒介し、規制し、調整する過程である」(「資本論」)というよく知られた文章をまつまでもなく、「労働」「労働一般」とは過程的なものであり、架橋的なものである。

いずれにしてもこの表現されつつある過渡的プロセスは生理的身体と規定づけられた無機的自然、社会的自然、機械的自然それ自体としても表象されることはできず、さりとて無機的自然と規定づけられた生理的身体、器官的身体一般の威力それ自体としても表象さ

いる経済的側面からの考察を媒介項にして、思想形成へのアプローチをこころみてみよう。

「だからこの経済的關係——生産關係の両極としての資本家と労働者がなっているところの性格——は、労働があらゆる技能の性格を喪失し、その特殊の熟練がますます抽象的なもの、無差別的なものであるものとなり、また労働がますます純粋に抽象的な活動、純粋に機械的な、したがって無差別的な、その特殊の形態はどうでもよい活動、単純に形式的な活動、あるいは同じことであるが、単純に素材的な、形態にたいして無関心な、活動一般となるにつれて、ますますより純粋でより適切に発展したものとなる。じっさいこの点でこそ、生産關係、範疇——ここでは資本と労働——の特殊の規定性は、特殊の物質的な生産様式と産業的生産力力の発展の特殊の段階との発展とともに、はじめて真実なものとなるということが、またもや明らかになるのである。」(マルクス「経済学批判要綱」)

「第三に、生きた労働力態にたいする価値の自立した対目的存在——したがってその資本としての存在——、生きた労働力能にたいする客観的労働諸条件の客観的な、即目的に持続する無関心性、無縁性、それは、これらの諸条件が資本家の人格の姿で——自己の意思と利害の観念とをそなえた人格化として——、労働者の人格に對立するところまですすむ。こうした所有の、すなわち物的労働諸条件の、生きた労働力能からの絶対的な分離、分裂——すなわち労働諸条件は生きた労働力能には無縁な所有として、別の法的人格の存在として、その人格の意思の絶対的領域として相對立する。——だからまた他方では、労働は無縁の労働として、

れることもできず、いわばこの両者の領域の相互規定性によって、両端からおしだされた個体の意識的行為と意識的観念存在としての、それ固有の「労働」領域を保有しているということである。

それゆえ、「労働」概念は意識としての労働、観念としての労働として、まさしく共同的な、先験的な資本制の時間に規定されつつも、それらとは相対的独自の個体的な「労働」時間(空間)として、対象的自然とも対象の身体とも相対的独自にとりあつかうべき不可避的な課題をせおっている。またそのような時代の現実になってきている。相互媒介的ではあれ、対象の外界としての生産物、観念物一般としてすべてを取れんとしつたりあつかうのではなく、さりとて対象の主体、労働者がいなければ生産物はできないのだ、という視座であつかうのでもなく、いわば両者をくりこみつつ、それらとは相対的独自の観念領域を設定するのである。ここでいっている対象的自然を「企業共同体」||「労働共同体」に翻案してもべつにかまわななし、また対象の主体を従業員、労働組合員に翻案しても構造としてはおなじことである。

もちろん、ある個体にとっての労働意識、労働観念は、意識的行為、観念的行為である以上、共時的な資本制生産様式、共同体水準の「歴史的」現存的な累積度を有しており、いっほうではたえず有機的身体、生理的身体を生存与件として生活過程や家族過程の歴史的「現存的」なものと抵触するし、また対象化された労働意識は、生産的自然、経済的自然として経済的側面に抽出すれば世界性(開放性)として外延してゆくし、また共同体の累積水準にまをしばれば「国家的共同体」枠や「企業共同体」枠にしばられてしまう。それゆえ、ある個体(労働者大衆)の労働意識、労働観念は、個体の

身体的与件と对象的外界（人工的、機械的外界もふくめて）の自然的与件の相互的侵透構造として、その函数度によって、ある時代の現実に表現され、またつぎの時代水準へと転移してゆく。

たとへば、古代と現代とおなじような自然時間に支配されている農耕作業、漁撈作業であったにしても、おそらくそれらの労働者を支配している個別的な労働表現の位相はそれ相当の歴史的な連続性と断絶性（転換）が当然のように想定されうるし、それよりもっと身近な例としてたとえある労働者がある特定の職業、職場をつづけていたにしても、その対象的現実（空間性）はすこしも変わらぬのに、こちら側の個別的な労働観念は経験蓄積や生理的年齢とともにすこしづつ構成転換していくこともよく経験することである。

資本制生産諸関係の高度化、膨化、あるいは経済的社会構成、「企業共同体」（「労働協働体」の過渡性）の相対的独自性の拡大とともに、「労働」「労働一般」はその特殊性、技能性、熟練性をうしななって、マルクスの提起しているように経済的表現としてはきわめて「抽象的なもの」「無差別なもの」「機械的なもの」「形式的なもの」「素材的なもの」「無関心なもの」に追いつめられてしまふ。おなじように、「企業共同体」（「労組共同体」もふくめて）もそのような要素で持続を強いられる。

もちろん、ここでは経済的側面を抽象化すればの話であるにしても、しかし対象的自然と人間の自然との相互規定性からおしだされた個別的な労働意識のもんだいに引きつけられ、おそらく資本制の徹底と圧迫化によって逆説的にはじめて労働意識が共同体的側面や対的側面から相対的独自に、個別的立場の固有の領域の諸もんだいと

縁性でもなく、強いて言葉で表現すれば「非縁の労働」「非縁な所有」（無縁や有縁のような相互対立概念ではなくて、止揚概念として）という概念であるとおもわれる。個別的な労働観念にとってもっとも本質的なものは、もし経済的原理からではなくて、より個体原理に引きつけていうならば、無縁でも、有縁でもなく、むしろ中性的な、非縁としての労働意識をあらゆる論拠の基底に人間存在の価値原基としておかれるべきではないか。

ここでいっている中性的とか、非縁性とかはなにも労働をしないとか、なにもかんがえないということではなくて、おそらく人間存在にとって労働すること自体についてたえず対象的に内省するということよりも、労働すること自体についてあまりかんがえない、ましてやみずからの労働行為の強制力や不可避性を階級的労働運動にも協調主義にも同致せずに、ただそこに労働があるから労働をするのだということのありきたりさの恒常性こそ身をひたしていることの方を対自化することがより本質的であるとおもふ。

「無縁の労働」「無縁な所有」をくりこんだ「有縁なもの」から「労働」「労働一般」の総体像（「非縁の労働」との関係性をもふくめて）を再構成しようとするれば、そこにわたしたちは労働の意味をみいだすであろうし、また「有縁の労働」「有縁な所有」をくりこんだ「無縁なもの」の総体像から労働意識を再指定しようとするれば、そこにわたしたちは労働の価値をみいだすであろう。もちろん現実的には行為はこちら側にあるのに、表現されたものは価値としてあちら側にあるようにみえてもである。また、労働の価値観の徹底したものを、わたしたちは労働の非縁性、意識の中性化にその根拠をおきたいとおもふ。

して、はじめてそれ自体として論理展開しえる契機をつかんだといふことができよう。だからといって現実的な労働者存在がすべてそのように展開しているとはいっていないのではない。論理展開が現実展開に転移するためには、それこそ想像をこえた時間射程と共同体的介入項を不可避としているにしても、方法的視座としてはこのような論理を包摂しない思想はすべて非現実的なものであることも自明なことである。

労働運動思想を構想する基軸は、このような個別的な労働意識の固有の展開局面、構成転換をどのように思想のなかにくりこんでゆけるかどうかである。この場合には、経済的側面においては「特殊なもの」「差別的なもの」の遺構的要素が、そして個体原理としては「共同体的側面」「対的側面」との遺構的媒介項が、労働意識の自体的な展開局面にどのような作用をおよぼしているかの考察が重要な鍵になってくるであろう。

また、マルクスの提起している「無縁の労働」「無縁な所有」という概念は、もちろん経済的人格としては資本家として表象される「物的労働諸条件」「客観的労働諸条件」との相互概念であるがゆえに、こちら側の労働者にとっては「無縁の労働」「無縁な所有」の強いられ方は、おなじく相互概念である「有縁の労働」「有縁な所有」を想定してしか可能ではないが、それゆえ個体の労働意識、労働観念が共同体的側面、対的側面とのかねあいでどのような「無縁性」の転換局面、展開水準の歴史的現存性に強いられるかは、おそらくこれも労働運動思想を構想するおおきな要素になるとおもわれる。

しかし、わたしたちにとってもっとも重要な概念は無縁性でも有

それでは個別的な労働意識や労働観念の窮極的な像はどのようなものであろうか。もちろんこれまで提起したように共同体的側面と対的側面とも相対的独自に、個体原理の水準としてのみ指定することは当然であるにしても、もっと具体的にいえば「企業共同体」（「労組共同体」をもふくめて）に身柄をあずけるとか、経済的社会共同体に身柄をあずけるとか、あるいは特定の産業、職業、職場、仕事に身柄をあずけるとか、あるいは特定の産業、職業、職場、仕事に身柄をあずけるとか、そういうことは相対的独自に（ということとは、共同体的側面の死滅の構想と一致している）個別的な労働意識が自体的に展開できるようになることである。つまり「企業共同体」にしろ「特定の職業的観念」にしろ、そのような過渡的なもの、公的な像を指定しなくても、ということはその反対に私有の労働意識を想定しなくても、個体にとって労働過程が自体的に表現できるようにすること、統括できるようにすることである。

このことはべつの表現でいえばこうなるかもしれない。「企業共同体」「農村共同体」あるいは「特定の職業的観念」の保有している資本制の高度化がもたらす共同的時間と、それと相互的な個別的な労働観念の意識的時間の関係が一義性、対応性をもたない歴史的現存的段階であるので、おそらく不可避にそれに規定づけられて労働表現は意識的な転換をほどこして平衡感覚をたまたなければならぬ。具体的には、ある「企業共同体」や「農村共同体」が解体してもほかの共同体が存在しているとか、みずからの職業に優劣感や差別・被差別観をもちこむとか、あるいはある「企業共同体」や「特定の職業」に執着するとかは、おそらくそのような価値観の多様

性が現在の存在するがゆえに、なおのことわたしたちは過渡的状況からの拡散を強いられるのである。

誤解されることはないとおもうが、「企業共同体」や「特定の職業」とかは、実体的なものをさしているのではなくて、あくまでも時間概念、観念的な自己統括力のもんだいとして設定している。なにも企業から企業へと自由にわたって歩く労働者や何十回となく職業を変える労働者のことをさしているのではない。何回、企業や職業を変えようとも、「企業共同体」や「特定の職業観」に身柄をあげているひとや、その反対に自己自身の労働者存在を至上化しているひとは、それこそ無数に存在している。そうではなくて、各々の労働者大衆の労働意識の内部で時間性として、自己統括力として、「企業共同体」や「特定の職業観」が相対化、部分化されていること、そして窮極的にはたとえ企業と似たようなものがあったにしても、それはもはや「企業共同体」とはことなるものに個別的な労働意識の側が転換してしまっていることをさしている。

もしも、ある労働者がある「企業共同体」で、ある「特定の職業」にかかわっているということが、なんの公的イメージも、ざりとて私有のイメージも換起せずに、それ自体として展開できれば、おそらくそのことは人間存在の窮極像を開示しているのではあるまいか。

「(a) その過去……労働組合は、はじめは、資本の専制的命令とたたかい、この仲間同志の競争を阻止するかせめて抑制し、そうすることにより、せめてたんなる奴隷の地位よりましなものに労働者をひきあげるような契約条件をかちとろうとする労働者の自然的な企てから発生した。

(中略)

(c) その未来。労働者が資本の直接の侵害に対抗することとはべつに、今後労働組合は、労働者階級の完全な解放という偉大な利益のために、労働者階級の組織化の焦点として意識的に行動することをまねばならない。」(マルクス「ジュネーブ大会への指令から」)

労働運動思想を構想するもう一方の批判軸である「労働協働体」概念、つまり現在の「企業共同体」編成概念(と同じくそれを離れては成立しえない「労組共同体」編成概念)の導入のもんだいとその方法的視座である。経済的側面においては個別的な労働意識の展開が生きた労働としての歴史的「現存性」と、対象化された労働としての現存的「歴史性」としての世界的共通性を保有していたにしても、それが現実的な社会的な局所に降りてきた場合には、現実的制約として不可避に最上位としての国家的共同体累積の枠組と、それに規定づけられた中・下位的共同体としての「企業共同体」の枠組を想定せざるをえない。

ここでいっている上位と下位とかは、高いとか低いとかをいっているのではない。強いて表現するならば、個別的現存性、個体的生活過程が対象を引きよせる度合いの相違である。もちろんある労働者にとって国家より孤立することよりも、「企業共同体」(広義には「生活共同体」)から孤立するほうが耐えがたくおそろしい。それは「企業共同体」の保有している共同体水準が、個体の保有している生理的身体、肉体的身体からの現存意識の遠隔化、分離化の射程がそんなに速くまでいっていないからである。

それゆえ、このような一定の遠隔化、分離化がもし「企業共同体」からの追放によって閉じられてしまうと、それだけ生理的身体の生

存と伴に過剰なほどの圧迫がかけられてしまうので、もっとも本質的な心身相関の領域でまいてしまっているのである。これに比べれば、政治的闘争やあるいは大学闘争は、個体の生理的身体の生存と伴からの遠隔化、分離化がより速くへだたっているばかりか、転倒さえしているのだからとえ追放されても前者と比べればそんなに過剰な圧迫を強いられないであろう。

中・下位的共同体としての「企業共同体」(時間概念としては「労働協働体」)「生活共同体」を媒介項とする個別的な身体的と伴の遠隔化から、さらに個体原理を媒介項(価値基底)とする身体的と伴の遠隔化が最終的に指定されるためには、つまりそのような社会革命が遂行されるためには、おそらく不可避に何十回となく最上位としての国家革命、政治革命のプログラムが行使されざるをえないだろう。革命とはこのようなもの以外ではありえないだろう。

「交換を本源的な構成要素として共同体のなかにおくことは、一般にあまりである。交換は、むしろ最初には、ひとつの同じ共同体のなかの成員にたいする関連というよりも、異なった共同体相互の関連のうちに登場する。」(マルクス「経済学批判序説」)という有名な一節を適用してもわかるように、ある「企業共同体」が関係づけられるのは「交換」に抽象化されている経済的諸関係(現実的にはさまざまな人的交流も介入しているが)であり、けっして「企業共同体」まるごとが関係づけられることはないが、しかしどのような「交換」を外部に抽出するかは、おそらくその共同体の構成が決定するだろう。

たとえ経済的にはまったく同一の製品を生産していても、その企

業の共同体編成がまるっきり異質な場合もありうる。もちろん「労組共同体」もおなじような傾向をひいており、同一製品をつくり隣りあっている企業同志の一方に争議が発生しても、「企業共同体」編成あるいは「労組共同体」編成の構成累積がことなっていれば、まったくなにごとも波及しないだろう。もちろんこのような共同の関係打破するのには、外部から階級意識やラディカリズムを主観的にもちこんでもこれらもまったくなにごともないだろう。

労働運動の主要な領域である「企業共同体」に規定づけられた労組運動も、たとえ戦前に多かったような企業外に労組があったにしても、やはり必然的に「企業共同体」の枠組にしばられざるをえない。ある企業内に争議が発生しラディカル化してもそれだけでは絶対に争議が他企業に波及するはずもないし(敗戦直後のような資本制的統括時間の喪失期はもっと別枠の展開軸が必要であるにしても)、また外部からの啓蒙や教育や宣伝によって波及するものでもない。要は、ある「企業共同体」と他の「企業共同体」との相互関連を媒介する要素はなんであるかについての本質的な考察がまずもって必要なのである。

現実的制約としての国家編成に規定づけられた「企業共同体」、とそれにまた規定づけられた「労組共同体」の共同的な転換局面もおなじように労働運動思想の構想のなかに包摂しなければ、たんなる主体性論か恣意的な主観論に没入してしまおうとおもわれる。そしてそのような共同体の意識に逆立ちして反映されている個別的な労働意識の展開水準を、共同的なものの死滅へむけて構想できるかどうかである。

以上のことをふまえるならば、もしも左記のマルクスの(a))

①)における労組運動の位置づけをたんなる空間概念、地域概念、
実体概念としてのみ把握してしまつたら、とんでもない誤謬をおか
してしまふばかりか、転倒した結論さえできてしまふだろう。個
的な労働意識が労働組合組織を媒介として(インター・チェンジミ
たいに)、平準化され、均質化されて、空間的にも外延的にも、政
治的闘争であれなんであれ簡単にむすびつけられてしまふ。労働組
合組織とはたんなるのっぺらぼうな連続した媒介項なのではなくて、
むしろ意志的に断絶した媒介項なのである。

労組運動がまるで自明な先験的な現実的制約であるかのように「
企業共同体」の壁をこええないのは、それは労組運動が不可避にあ
る編成段階、構成段階の「企業共同体」的側面をあつかわざるをえ
ないからであり、またそれゆえに本質的なものである。そしてこのよ
うな生理的身体の遠隔化としての中・下位的共同体的な壁に衝突し
はねかえってくる過程、そしてそのような思想をくりこむことにな
かにしか労働運動思想の基礎理論は構想されないのである。

マルクスの一節は、おそらく空間概念ではなくて、むしろ時間的
累積概念として、あるいは労組運動の共同体的な不可避な壁と、そ
の不可避な壁を結節点とした意志的な断絶としての外延性として把
握しなければならぬ意味しないアジテーション風の一節になつてし
まうだろう。

誤解される人もいるかも知れないのでことわっておくが、本稿で
はあくまでも労働運動思想の構想に限定して論をすすめている、と
いつてもけつして個的な運動や共同的政治闘争を無視しているの
ではなくて、それらの他領域を前提とし、それらを包摂しつつ、労

働運動思想の自体的構想をはたそうとしている。政治権力闘争の視
点がないとが、社会革命主義的だとかいう、とんちんかんな批判に
たいしては最初から予防線が張られてある(止揚してある)。労働
運動領域と他領域との関係は論をあらためて別枠で考察してゆきた
う。

「企業共同体」「労組共同体」概念を時間軸の側からみるという
ことは、それらを個的な労働意識が矛盾や転倒をはらみつつ展開す
るための不可避的な介在的存在、過渡的な媒介項としてのみそれら
に有意味性をあたえるということであつて、けつして個体原理と
つてかわられるような有価値性をあたえるものではない。労働意識
や労働観念を自然的外界と自然的人間からおしだされた固有の領域、
あるいは個体原理にのみ基礎づけようという立場からは、「企業共
同体」「労組共同体」概念は、原理的にも、ということでは実践的
もやはり相対化、部分化されてゆくことである。しかしながら
ら、企業存在が公共的なものに転化しているものや、私企業あるい
は中・小下請企業として表現されている場合の相対化、部分化の
度合いは、その共同体累積の仕方によってことなってくるだろう。

戦後社会の膨化、拡大は、このような労働意識の恣意性、自由性、
偶然性、無関心性をあらゆる企業存在の基底に強いさせているけれ
ども、だがそのことをわたしたちが労働運動思想の構想のなかにく
りこんでいたかどうかはまた別のもんだいである。と同時に、「特
定の職業観」や「職業的偏見、優劣感」もだんだんと相対化、部分
化されるとしても、これもやはり歴史的、過渡的な共同体的存在を
介在させなければ、けつして個体原理の側に最終的に展開すること
ができなう。

労働組合であれなんであれ、それが集団として、組織として編成
しなければならぬのは、けつして弱者が多数あつたれば団結力が
強くなるということではなくて、客観的な根拠としてそのような不
可避的な存在と条件が状況として強いられるがゆえに、労働者も集団
として、組織として発現しなければならぬのである。しかしその
ような労働者組織の指導層の理念が右記のような思想を包摂してい
るかどうかは、これもまたまったくべつのもんだいである。

「企業共同体」と「労組共同体」との関係、現実的な企業編成(公
一私企業をふくめて)と労働者組織との関係性、そしてそれが明
治以降の日本的な展開については別稿で述べることにして、ここで
はただこのような方法的視座を導入しなければ、労働運動思想の構
想としての最底限の思想的鞍部でさえも獲得できえないし、まして
や賃金論や合理化論や技術論や職階制論などもこのような視座から
再構成しないとどうしようもない古典的モデルの世界に回帰してし
まうことを提起しておきたい。

それゆえにこのような思想原理の前提的な基礎概念を導入しえな
い党派的な(最初から党派性であるのではなくて、このような視座
を包摂しえないから党派的閉鎖性に落ちるのである)労働運動思
想は本人や組織がどう意識しようがしまいが、必然的にかつての社
会ファシズムか農村ファシズムの変形された亜流に転落してしま
うだろう。戦後歴史の思想的累積は、このように冷酷なものとして
よんであろう。

△たたかいVの持続の根拠とは何か

S 工高闘争の総括

太刀川 守

立川の昭和第一工業高校におけるK非常勤講師解雇撤回斗争は無条件原職復帰という「全面勝利」で決着がついた。今年4月24日で4年半の争議はその幕を降した。

理事会―当該労組間で結んだ協定書の内容はおよそ次の通りである。

- 一、K氏の無条件原職復帰
- 一、理事会は労組に解決金五百万円を支払う。
- 一、今後組合員の身分その他に関しての変更は組合との協議合意を必要とする。

それ自体としては「全面勝利」と言えよう。今当該労組はこの事態を複雑な感情で受けとめている。「長く苦しくもあった闘いが終わった」という満足感とも解放感とも言える感情と共に「何かが欠けている」という意識はおおい隠せない。何故か。

本来「争議」の決着は、当事者の具体的要求が決着の内容に応じて現実化したという具体的なものでしかない側面を持っている。その側面から見る限り、斗争過程での苦しさや困難さに応じた満足感

や解放感が残るだけである。「何か欠けている」といった空洞感、当該斗争過程で引き寄せた幻想領域の延長上にあるに違いない。何故なら「解雇撤回―原職復帰」という現実的関係を求めた限り「決着」はついたのでから。

今一つの争議経験を「体験談」とは違った位相で総括するとき、当該支援が斗争過程で不可避に引き寄せた幻想領域Vの内容こそ重要であるに違いない。何故ならそれ以外はA体験的なものVでしかないからである。個別斗争の自体的勝利の代数和が階級斗争の勝利を意味しないように、A体験的なものVの積み重ねが労働者運動の普遍性を獲得しないことはほとんど自明であるように思われる。

しかし逆に一つの個別斗争でもそれに固執することからA普遍的なものVを透視することができると思われる。個別的なものは、特し、性を本質とするのではなく、A資本制社会Vという普遍性の中で文字通り個別的に存在することを本質とするからである。

ここでは「何か欠けている」といった空洞感の解明を通じて昭和一工における争議経験を総括してみようと思ふ。

K氏解雇の直接の契機は、当時（S45年10月）「学校批判」を理由になされた生徒処分への異議申し立てにあった。この生徒処分が当時の職員会議（専任教師のみで構成）で決定されたという関係上、理事会の「生徒処分への異議申し立て―教師不適確―解雇」という論理は、多くの教師に受容されたと言える。本来「教育問題」と

「労使問題」は別事である筈だが、教育秩序の権威的存在としての校長が同時に理事として企業秩序の頂点に存在することに象徴されるように、多くの私学では教育秩序即企業秩序という地続きの構造があるように思われる。したがって、「生徒処分、K氏処分の白紙撤回」を具体的獲得目標とした昭和一工闘争は、必然に昭和一工の教育秩序への叛乱的なものを有することなくしてはあり得なかった。

そしてそれは「生徒こそ教育秩序の最低辺に位置する」という即時的認識と、校長室への団交要求行動の過程で多くの教職員が「教育秩序を守れ」「学校を守れ」とばかりに敵対してくる関係から、「生徒との連帯」こそ闘いの原動力だとする認識が生まれるというようにあったと思ふ。

一体「生徒との連帯」とは何か。

労働者からする「生徒との連帯」とは何なのか。当時の当該支援の「生徒との連帯」なる発想は、前記の如き「強いられた関係」という側面を持ちつつも、一方で68～69年の学園斗争の経験的イメージを引き寄せることによって可能であったのである。

現在の「公教育」体制がA教師―生徒Vの対立的関係を導入するこ

なしして不可能であるが故に、「生徒との連帯」を教育労働者の側から提起することは、「倫理的なもの」や「自己否定的なもの」を含むことは必至であった。勿論、圧倒的多数教師は敵対的にたち現われた。彼等大衆的部分の敵対行為を規定した意識は複雑であったと思われるが、単純化すれば「教育秩序」や「企業秩序」を守れ式の共同性への同致であった。

そして直接的な「生徒との連帯」志向は完全に破綻した。現象的に見る限り、①生徒はピラ等読まない（昭和一工のほとんどの生徒は言葉や文章などで啓蒙されない）、②当該支援の直接行動が、日常的に抑えつけられている生徒代行的なものであるが故に、即自的には生徒の支援を拡大しながらもそれ以上にはなり得なかった。③生徒の支援とは逆に、教職員の反発は拡大した。等々といった形態的敗北は不可避に昭和一工斗争の質的変容を強いていたと言える。ここでの敗北と、他方昭和47年12月の「解雇無効」の勝利判決という外在的契機を得て、昭和一工斗争は「解雇撤回斗争」へと純化してきた。

右の転換期において、当該支援は如何なる総括をなしたのか。唯一言えることは、「生徒との連帯」を直接的なそれとするのは不可能であり、教育労働者は自己の場において闘うことを通じて「生徒との連帯」を志向すべきではないか、といった風であった。確かに経験的な総括と言えよう。しかし問題なのは前提的なものが依然としてアイマイであったということである。つまり、何故「公教育」への叛乱なのか、何故「生徒との連帯」なのかが対象化されることなく、自明の如くであったことの問題である。強いられた関係として「生徒処分」や「K氏解雇」がはじめにあった

という所からは、「公教育」への叛乱や「生徒との連帯」という志向は自然的な側面を持っていたとも言えるが、斗いの流れと共に「自明な前提」となってしまうこと、そしてそれが何故敗北したかへの総括こそ重要であると思われる。

前述した如く、当該支援の唯一の総括も形勢的敗北において「生徒との連帯」は「直接的なもの」ではあり得ない、ということとどまっている。おそらく何故敗北したのかということこそ問われなければならないし、それ抜きには「解雇撤回斗争」への純化への連続性も総括し得ないのではないかと思う。

何故、教育労働者からする「生徒との連帯」に敗北したのか。生徒の「斗いの核」が内部にない中で「外部注入」的なやり方の限界ということは本質的ではない。教育労働者が直接的にそれをやろうとしたことこそ本質的な問題であろう。

①教育労働者が労働すること自体、直接的であれ間接的であれ生徒への管理支配を行なうことになるという関係の中で、それを否定することは必然的に自己否定的な運動とならざるを得ない。

②ここでの自己否定とは、日常的な生徒への抑えつけに対する自己倫理の別名であり、これを運動化することは自己倫理の共同性へのひきあげという錯誤とならざるを得ない。

③確かにこの運動は「民主教育理念」や企業共同性といった「公共性」を引き寄せる教師集団と一定の拮抗を不可避としたが、運動自体もつ自己倫理共同化錯誤と「公共性」を一義として転倒する教育労働者の現在の階級的水準とにおいて敗北したと言うべきではないか。

以上が現時点での私の総括である。

△日常性▽の側からやってくるのだ。生徒への処分は以前以上に日常的に行なわれていくし、ほとんどの教職員は解雇問題については何事もなかったように沈黙を保っている。当該はあたかも昭和一工の△日常性▽の中にみ込まれたといった感じが強い。

一体一つの争議が終るとは何なのか。一つの△争議▽における「勝利」とは、当事者の要求の獲得であり、その分だけ経営者を追いつめたと言える。しかし観点を交えれば経営者にとっては「要求を受け入れた」方が得策だと判断した時点において△争議▽は決着するとも言えるのである。つまり△争議▽とはどんなに戦闘的であれ過激であれ、△争議▽以上ではないに決まっているのだ。だとすると、△日常性▽への復帰を空洞感として受感する当事者は何によってそうなのかという問が浮き上る。それは当事者の△争議▽の波及力への思い込みによっていると言わなければならない。つまり△争議▽の決着が△日常性▽へのみ込まれなどは夢にも思わなかった当事者の△幻想▽の領域の問題である。

△争議▽とは日常労働過程における「異常」な事態に違いない。いわば日常的な労働過程での諸矛盾を△非日常▽として露呈させることを不可避とし、そうであればある程敵が視えてくるし、自己（労働者）を対象化することも意識の自然過程として不可避にやってくると言えよう。

つまり△争議▽とは、当事者の具体的現実的要求の獲得を本来の目的としつつも、その過程において不可避に自己を対象化し、幻想を引き寄せるものであるようだ。

それでは、昭和一高斗争という△争議▽において当事者はどのような△幻想▽を引き寄せたのか、そのことと現在の「空洞感」と

当時の当該支援は、ここでの敗北を形勢的にしかおさえていない。したがって「解雇撤回斗争」への転換からその自体的勝利の現在までも「形態」だけが問題になるという継承をなしてきたのである。勿論私はかかる当該支援の有り様に不可避的な一面もあったと付け加えるべきである。ここには△争議▽のもつ困難さがある。

ところで「解雇撤回斗争」へ純化して以降の昭和一工斗争は、△斗い△が何なのか△といった当該支援のアイマイな共同性をひきづりながら文字通りの実力斗争を理事会糾弾—大衆団交要求斗争として展開してきた。そして、極少数の当該でありながら地域労働者と連帯して実力的な斗いを継続する中から前述の「全面勝利」を勝ち取ったのである。

私は今、4年半の争議経験を省みて、△争議▽とは何かという問を試みている。

言うまでもなく、日常的な労働過程において不可避に加えられる労働者への諸弾圧に対し泣きねいりしない限り、斗いは必然であり△争議▽は生起する。そして当事者の諸要求が認められた時点で△争議▽は終る。つまり△争議▽の生起や決着は、当事者の具体的現実的諸要求をめぐってなされるのであり、それ以上ではないかのようにもある。その意味において昭和一工斗争は決着がついた筈である。しかし当該の中にある空洞感、単に決着したことにより緊張感がおれたものとは違って「充足されない」何ものかを象徴しているに違いない。それはおそらく△争議▽が終った昭和一工での

どうつながるのかと問ってみよう。

結論的に言うならば、それは極めて△アイマイなもの△と言える。たとえば、「生徒との連帯」志向から「解雇撤回斗争」への転換期において、教育労働者からする「生徒との連帯」の意味するものはほとんど問われることなく、ただ生徒への直接的連帯志向の形勢的破綻を確認し、「解雇撤回斗争」へと変容したのだが、少なくとも「生徒との連帯」は戦術的にたてられた訳ではなく、「公教育」への叛乱的志向が前提的にあつたのであり、「生徒との連帯」における破綻を契機にその幻想内容が徹底して問われるべきであった。

ここに△争議▽の持つ困難性がある。△争議▽の持つ二重性と言ってもよい。つまり、現実的具体的要求を獲得目標とする本来性とその過程で不可避に引き寄せられる幻想性とのもつれの構造である。「今教育」への叛乱的志向自体が問われつつも、処分状態は日常的に続いているという二重の「攻撃」への対処の困難性である。幻想性を切り捨て、現実的要求獲得にのみり込むのならいいに決まっている。しかし当該だけならまだしも、当該支援一体となって幻想性を切り捨てることはあり得ない。何故なら少なくとも支援とは幻想を介して現実を視る位相でしか支援であり得ないからである。さて、問われている所の「公教育」への叛乱的志向自体の対象化を無視したのは、幻想性の切り捨てたのではなく幻想性のアイマイ化であったと言わなければならない。つまり本質問題への対決を避けることによつて△斗い△がつけることが何なのか△といったアイマイな共同性を当該支援の中に累積させてきたのである。こういつた当該支援の共同性は、必然的に「何故斗うのか」という問を禁制とせざるを得ないのである。常に「処分状態はつづいている」という強いられ

た側面の強調でもって斗いの根柢は完璧となるのである。

争議過程で当事者が引き寄せる幻想が何故△アイマイなもの△になつてしまふのかという問は本質的である。

それへの解答は前述した△争議△の持つ二重性のからみの構造にあると言える。そしてここには不可避的な側面と斗いの上底的な側面があると思われる。前者は△争議△自体が資本からの攻撃の連続性としてあることにより、現実的反撃が不断に要請され、引き寄せる△幻想△がアイマイとなるという不可避性であり、後者は当該自身の争議過程で生起する諸問題への対処の仕方が疎外するものとしてである。ところで昭和一工斗争における質的転換期での対処の仕方はどうであったかという問にもどうも。強いられたものとしての

「生徒処分」や「K氏解雇」という関係が引き寄せた、「公教育」への叛乱的志向の幻想的内容自体が問われることなく、△斗いつづけることが何ものか△といった価値基準をアイマイに累積させながら「解雇撤回斗争」に絞り込んだというのがその本質であり、ここでの△アイマイ△は最後まで昭和一工斗争を支配したと言えよう。つまり、「生徒との連帯」志向の現実的敗北を形勢的でしか総括しえなかつたことによる△アイマイなもの△の引き寄せと、そこでの質が後の斗いにも継承されることにより、決着がついた現在も「勝利」の形態が高く評価されるといふ錯誤を許しているのである。

つまり「当該が極少数でありながら、地域の労働者と連帯して、実力斗争で全面勝利を勝ち取った」という事実が「労働運動の戦闘的潮流」の一つの前進であるかのように語られる結果を招いているのである。かかる事実主義者に対しては他の事実を見せつけければ充分であると思われる。△争議△の決着が擬制的な△日常性△へのくり

込まれとしか思えない昭和一工の現在の事実である。彼らの錯誤は、労使間でしか解決できない当事者の要求実現に関する事実を階級攻防での何ものかにすり返していることで致命的と言わざるを得ない。

全面的に決着がついたにもかかわらず、当該が決着による緊張緩和とは別の位相で「空洞感」をかかえ込んでいるのは、おそらく「全面勝利」が「無条件原職復帰」という自体的なもの以上に昭和一高に変容を強いるであろうといった△アイマイなもの△による期待が、逆に△日常性△へのくり込まれをもたらしたことの「充足されない」感覚の表われであったと言える。

△争議△の決着は何故職場の△日常性△へのくり込まれとなるのか。つまり何故決着と共に斗いの連続性が切断されるのか。言うまでもなく、△争議△は当事者の要求が認められた時点で決着がつくことと、職場の△日常性△が変わらなくとも要求実現は可能な場合があるという事実によってそうなのであるが、問題なのはここの問を「空洞感」として受感する当該のあり様であり、「空洞感」としてしか受感しえない△幻想△の水準である。つまり争議過程で引き寄せた△幻想△の内容である。

おそらく、現在ほとんどの教職員が解雇問題に対し沈黙せざるを得ないという事実は象徴的である。このことは解雇斗争への教職員のかかわりから想定された筈であった。つまり、教職員のかかわりは「労組をたたき出せ」と主張する極一部学校派教職員と「問題なのは誠意をもって団交に応じない理事会にあり、このまま争議が長期化すれば学校がダメになる」とする良心的教職員と沈黙せる大衆的教職員に別れるが、強度の差はあれ「学校ナシ・ナリズム」に同

致していることにおいて同一であったのであり、△争議△が終りさえすればよいというかわりの本質からは現在の沈黙は透視しえた筈であった。要するに、昭和一工斗争は「理事会は早期に争議を解決すべきであり、教職員は労組の斗いに敵対すべきでない」とする良心的教職員の動きを最大限利用しつつ「職場復帰」を勝ち取ったのであり、その意味では、「教育秩序」や「企業秩序」を守れ、といった△公共性△への同致を利用することで技術的に「勝利」を得たに過ぎないのだ。

さて、ここまできて再び△争議△とは何かと問うてみる。確かに△争議△は当事者の具体的要求の獲得を目指すものであり、その限りにおいては要求実現に向けたあらゆる手段が考えられよう。場合によっては、労働者運動において最も敗北的とも言える△公共性△の引き寄せの構造を逆にも利用することもあり、戦術的にはありうるのである。しかしそれは△争議△が不可避に引き寄せる△幻想△をアイマイにすることによって可能であるのではないか。解雇攻撃に對し解雇撤回斗争を斗いつづけるとき「職場にもどらなければ喰っていけない」という関係がない限り、「何故斗うのか」という△観念的なもの△は問われなければならない筈である。

昭和一高斗争は、「何故斗うのか」という問が主体の内存在性の開示としてより良く解かれなかったが故に、その分だけ先験的な、かつアイマイな運動理念を引き寄せていたに違いない。つまり形態的に「勝利」することが重要であるという判断としてであり、その前提には「大衆は力関係の強い方にしか動かない」という「事実主義」があつたと言えよう。確かに右の大衆像は一定の真理ではある。しかし依然として日常過程での矛盾を共同的な幻想に疎外する大衆の

あり様を思想的にも実践的にも解き明かさなければ、労働者運動の△自立△もあり得ないのであり、△争議△において△公共性△を引き寄せることにより擬制的に逆立する労働者大衆（教職員）と如何に拮抗するかということもあり得ないように思われるのだ。

4年半の争議経験と試行錯誤を通じて今、私が△争議△についていえるのは唯一次の如くである。

I △争議△は早期に解決するにこしたことはない。当事者の具体的な要求の獲得を本質とするからである。

II しかし争議過程においては不可避の如く△幻想△を引き寄せざるを得ない。

III 争議過程において△アイマイなもの△を△幻想△として引き寄せるのは、争議団内関係や争議過程での上底化の結果であるに違いない。

IV 争議過程において不可避に引き寄せる△幻想△は徹底して開明的にしなければならぬ。そうでなければ△アイマイなもの△へ転化してしまふであろう。

確かに昭和一工斗争は、△争議△としては「全面勝利」という決着を勝ち取った。

しかし不可避に引き寄せる△幻想△をより良く扱えなかつたことで、一方における△斗い△の連続性の内存在性が透視できず、他方において思い込みの評価を許す結果となつていふことはおさえておくべきである。

そして昭和一工斗争での「勝利」が当該労組の全面的な市民権を獲得した今、4年半の経験を内化することによって、教育労働者の「公共性」と拮抗する新たな闘いははじめようとしている。
今より更なる闘いを、である。

吉本隆明講演集

根柢への出立に向けて

B5版 / ￥500

●六・一八共産同政治集会特集号
更に、また、現在より起て

自立と日常

吉本 隆明
神津 陽

B5版 / ￥250

SECT6 + 大正闘争
全資料集

- ◇SECT6バックナンバー
- ◇SSL通達
- ◇中大、早大、東大資料
- ◇大正行動隊ニュース
- ◇共産主義同志会、炭労^{etc}
- ☆解説
- ☆SECT6について

三上 治
吉本 隆明

B5版 / ￥1000

II

- 一、学生運動の規準をめぐって
- 二、八知V的過程の自存構造と大学批判
- 三、大学像の解体と転向の根を撃て

学生運動の基準をめぐって

坂本直

① 理由もなくある時代の精神の負荷をかけられることと、私達の心的過程の自動律との間の断層が拡大し、空洞の暗闇に対する観念の恐慌の波は果てしないように思える。この断層や空洞が拡大しながらも、私達の感情を、その対象も不明なものに投げかけんとすればする程、投げかけられた感情は表現の内部で個有性をかきけられ、時代の「精神」機構の一分岐としてしか帰結しないことよって、そのつぎ目も判然としなくなるといふ経験をここ数年間、たびたび経験して来た。この「空隙」を自己の心的過程や、倫理的意識によつても、接続する事の出来ないある歴史的な現存性を想像力の内部でうかがうことを追求しながらも、悪い時代からの被害感覚を処理する方法を持たないまま、武器なき抵抗を試みて来たといつてよい。私達が深く日本の学生運動にかかざり合つて来たのは、理由が無い訳ではない。私達が存在として「時代」の側に投げ出されたときに見た精神の風景は、「衰退」を「成熟」といふ概念でおきかえている日本の知識人—大衆の敗北の沼地であつた。つまり「感性」を生理的な時間や経済的な共同利害に規範化されている時間に服従させることよつて「自殺」を強いてくるという日本的な「自然」に対する観念への根柢的異和を表現する契機は「若輩にむだ飯をくわせる」特権としての大学共同幻想を逆手にとることにおいてしかほんど不可能であるという先験性が支配していたといふことができる。

60年代後半の学生運動の開示したものは、時代の最高の感性の成熟した姿であり、共同的規範としてその出自をそぎおとして構造化されている「知識」から解放された精神であつたといつてよい。

つまり、私達の世代がひいては自己追求や共同作業の結果としての「表現」位相を内部で産み出したというより「産業が直接に非人間化をますます徹底せざるよりなかつたかぎり、自然科学はそれだけますますこの産業をとおして活発に人間の生活に介入し、この形態を変化させて、人間解放の準備をととのえたのであつた」（経哲草稿）として戦後資本制社会の鞍部で前世代の諸個人が意志することなく産み出した歴史の蓄積そのものに他ならない。比喩的にいうならば、「子供が親の成熟した姿」であつて、それは特定の家族の親の意識による子供との直接の関係づけや了解づけを超えた、そして親の世代の個々人の恣意性を超えた歴史的現存性としての社会の所産である。

この事の顕現化の過程は、60年安保闘争を支えた学生大衆の感性の底流であり、安保ブントの逆説的な死は、その時代的感性のとてもない普遍性と、その言語思想容量の過渡性、限定性の二律背反を象徴するものであつた。つまり戦後社会において開化した私的利害や恣意的自由の強いられた仮構の裡に、前世代が、天皇制に体现される時代精神の「民主主義」への転換を内部で生活価値の転換として公的なるものからの私的なものの分離を内在的に扱いきれずに戦後ナショナルリズムとして生産力思想やプラグマリズムへ概念化して連続する他なかつた「文化的貧困」とは別に、本音においても、たてまえにおいても、私的利害や恣意的自由を自然のものとする準位へ励起した戦後世代の精神を表出せんとしたのである。生産力思

想やプラグマチズムとして主題や根拠を喪失する事によって概念化された戦後ナショナリズムの内部で、大衆は、高度な資本制的秩序を自己の表現の論理へ自己同致することが出来ずその生活過程の内部で、様々な禁制や黙契の体系を社会的な幻想として表出する過程を歩んだにちがいない。つまり、「もしも対象が人間に対して、人間の対象として、もしくは対象的人間として成立すれば、このときに限って人間はその対象のうち自己を見うしなうことはない。」(経哲草稿)のであるが、このようなことが可能であるのはA対象Vが人間に対してA社会的Vに認知しうる対象であり、又社会が対象の内部において人間に対する本質存在として経験的に認められうる観念(文化)の成熟を前提にしているのだから。ところが、日本の社会の構造においてはA対象Vが人間的である以前に自然(非有機性)有機性かの分離も不明のままとして先験化されているため、A感性V的な実践によつてそれを埋め合わせようとすることに對して不可避に変質や転向を強いたのである。つまり経済社会構成の基軸としての、労働力、商品、貨幣、資本という私的原理、所有観念を自存的に抽象的人格として構成する尖鋭性へ上昇することに社会再編が照応するのではなく、新たな二重構造を無秩序的に膨化する自然過程を、大衆の敗北の屍の上で歩んだということが出来る。

そして日本の知識人、政治諸党派は、そして「労働運動」の冠をいだいた非党派的党派は、戦後革命の総敗北のうちに60年安保斗争を国家としての国家(自由)の完成運動として、十五年戦争での翼賛会運動を喜劇的に再生産したにすぎない。このような懐死の中で「学生」運動に表出した感性こそ唯一の革命性を発揮した。

(II) 民主制の完成から、依然として概念構成として「自由」であり

思想と論理の力がとわれたということが出来る。この事に無知な諸党派や知識人は、大衆の感性からの孤立を、自己の倫理においても、歴史的現実とのウィジョンとしても扱う事が出来ず、総転向を開始したということが出来る。つまり彼らは、共同宗教としてのみ現存的であった大学を、「革命の拠点」や「差別のない大学」等として連続性を仮構することによつて、自己の共同的契機をますます未開な観念へ退却させるか、即ち60年以降の支配理念である構造改革思想として「大学」のA宗教性Vを賦活せんとしているのである。宗教も心ひそかにあつかわれれば、この悪い時代には、個体の現存意識の自己投影のよるべであるかも知れない。つまり、大衆の強いられた恣意性は、人は生きるために自らのA平隠Vの場処を求めざるを得ないという意味では、あらゆる面で救済すべきである。それは、個人や家族という新しい人間的範疇と、共同体という旧き人間的範疇の「過渡期」における逆立の不可避的、自然的な表出過程であるからである。しかし、無知な党派や知識人の大学賦活論は、自らの知的過程の貧困さと、知の出自の根拠(価値)の回収を想定しえぬまま、饒舌に自らの姿に似せた貧困な大衆に宣教するという犯罪性を示している。このような感性の自殺をすすめる「学生運動」は私達の敵である。

私達が60年以降の「学生運動」において擁護すべきは、その時代の成熟した感性であり想像力以外ではありえない。その想像力は、日本の資本制社会と近代国家のらん熟がうみ出した自己の墓堀人である唯一の契機であるA成熟Vした感性という意は、「関係」として抽象化されることがあつても「生理」に還元されることはありえない。(そのときは人間を動物性とみる限りである。)自己が自己

又、社会過程としての近代資本制的観念から「独自」に仮構としての安息の場を「大衆の知への願望」としてのナショナリティを集中した地上の彼岸たる「大学」も60年以降、社会の有機性の高度化の裡に変貌を強いられていくのである。つまり、完成された国家が無神論を宣言すればするほど、社会的ナショナリティとして存在した大衆の大学への有神論(知識の来信仰と経済的利害の未分離)が衰退し、あたかもプロテスタンティズムとして経済利害を付着する以外ではA個人宗教Vとしてしか表出不能であるように「大学」共同幻想を追いこんで来たのである。

人間の特定の対象として、心像を引きよせるような水準以前の、宗教的对象として先験化されている大衆の幻想性を共同性として疎外したA知識や技術Vは、社会的総労働として一般化された資本の共同観念へ転換を強いられたのである。つまり、商品の私的所有意識へと平準化されることによつて、大学をA資本制社会Vに溶解させることで急速に、大学共同幻想をA危機Vへと追いこんでいるのである。このことは60年代の学生運動が、大学共同幻想を逆手にとつてのみ、時代の感性の同一性をA国家Vとは独自の位相で組織しえたし、その革命性を保持しえたことに対する強烈な反動であることは確かである。A学生VははじめてA学生Vとしてではなく、社会の内部で自己の感性と歴史的A現実V水準として、個人として遇されるにいたるのである。

全共斗運動が、はじめてこのような主題過剰さを学生運動の内部で不可避にかかえこまざるをえない局面に到達を強いられたということが出来る。つまり「政治」的学生運動を大衆のナショナリティの核の喪失によつて空洞化させられ、学生運動の内部で、本格的に

に関係をもち、自己が自己以外の特定の人間の対象としての他者に関係をもつというA関係Vの場の構成は、A共同幻想Vとして関係に還元されない空洞をA生理的自然や非有機的自然Vを仮構したA構造Vへ転倒をなすことをはじめて社会過程へ流露させたのである。これはA個人Vが則社会であることもA家族Vが則社会でもない、つまりA逆立Vすることによつてしか社会と関係づけられない矛盾を禁制や黙契として疎外した人間の観念の自然過程に對して、矛盾は矛盾であることA逆立VはA逆立Vであることによつてのみ本質的であることを想像力として解放したことである。つまり感性の成熟の過程は、この流露された経験をどこまでも永続的にするところにしか想定不可能である。私達は「政治的」学生運動と大学共同幻想を失うかわりに、知的過程の自立と大衆の知識からの解放のウィジョンと原理を掌中にした。これは、誰が何といおうと、60年代の学生運動の遺産として誇りうることである。

(III) 現在の内ゲバ、部落問題、爆弾等の浮上は、60年代学生運動の遺制であり、戦後の社会的ナショナリズム喪失の逆説的表現である。それは「ポルノグラフィがエロチシズム喪失」のグロテスクな逆説であることと「模写と鏡」の関係にすぎない。大衆は高度経済成長に参与する過程で合理化とひきかえに「生産力にみあう賃金」をとさげんだ労働貴族や、戦後の知的ナショナリズムを規範化していった革新政党とつきあう事と訣別する事の二重性を使いわけ余裕を喪失することによつて観念的恐慌に身をちぢめ、沈黙の領域を拡大している。そして、全世界的な意味での経済過程のインフレーションの構造化は、労働過程での自己表現の連続性の内部時間を、支配の技術によつて外的秩序の高度化と収奪の絶対的拡大として、その

恐慌を累乗化している。知的ナショナリズムとして完成された「自由国家」はその永続性の仮象を経済的な共同利害というものによって規範的拡大で代位せんと試みながらも、その理念性を衰退し、徹底的に形式化、機能化させている。しかし知的過程は、その価値構成の転換を、知的過程の出自からの歴史性を有機化する特定の個体の恣意性と無償性によってしかなされ得ないことは先験的である。従って「自由国家」は自体として止揚されることはないことも又先験的である。だから、私達より15年以上後れたところへナショナリティの復権を求める知識や諸派の国家改良思想は木に竹をつぐようなものである。支配者層も、民衆もその先を進まされているし、私達も又、そうである。

私達が、部落、内ゲバ、爆弾等を笑うことができないのは、その交通の不可能性においてではなく、60年／＼全共斗／＼早大斗争において、私達の恣意的な選択の了解とはべつに、時代の言語思想や知的過程や身体表現において関係づけられる客観性の位相において依然とし手を汚させられていることにおいてである。否、その現実的根拠を止揚する負債を未だ一端においてしか実現しえてないからである。そして、全共斗以降の時代精神の変容と解体において同時的、共時的課題である。

(Ⅳ) あらゆる「大学」は解体されねばならないし、又知的過程の本質の不可避性として解体する以外にない。そして、それに同伴している「政治的」学生運動も消滅することができぬ。「先駆性」論、「同盟軍」規定論、等の感性の表出と、言語思想の尖端性の距離をとれずに純粋化した学生運動のロジックは形骸だけを縮少再生産して、大学共同幻想につくりかえられている。その典型を、我々は「

遺制が揚棄されないかぎり、依然として△大学▽問題は政治性を刻印されている。貧困な現実を現実たらしめよ。そしてはじめて天上の批判は地上の批判として復権する。

△知▽的過程の自存構造と大学批判

藤 田 浩

(1) 大学斗争の内在的展開の構成転換

その経験的抽出について

現段階での学生運動が、全共斗運動過程の表現の△極北性▽の対極に依然として、△環▽の不在(個別課題の揚げ底化の擬制で連続させているが)として今日性を現象させているということ、このことは誰もが諒知している。問題はそのことを如何に説明するのかわけなく、どのような止揚の契機を我がものとし得るかにある。従来△の斗争の△理念・形態・主体▽の表現面での構成の転換として抽出しうる問題は、現象面では次の二つの側面から検討しうるである。一つはどのような課題であるかと、そのこと自体の連続性、継承性として不可避的展開を強いられてくる位相をどのように扱うかということ、それがどのような遺構的な表現構造をもとうとともである。二つには課題は課題でしかないことを押えたとしても、やは

新入会」、「山村工作隊」、「自己否定」、「学園全共斗から安保全共斗へ」、「中央権力闘争—マッセンスト」そして現在の爆弾と内ゲバとして、大衆の社会的ナショナリズムからの孤立を、「天皇制」という日本社会の内部で根柢をもたず概念化した共同幻想の遺制とそれへの拮抗を構想しないで転向の再生産の今日的姿にみる事ができる。どのような近代的、革命的装いをとろうが、△知識や技術▽の外來性を宗教的対象として共同幻想へ疎外した△天皇制▽の構造を止揚し得ていない。そこでは、知識の自然的上昇も、知的過程の内部で恣意性を解放することもない。つまり△大衆▽の知の先験化意識という敗北と、その敗北を不可避とした民衆の生活水準の貧困さによる文化の創造力水準の基盤を内的に省察する根柢もないのである。

つまり知的過程の内部で、その無償性と恣意性によって生活過程や労働や家族の諸活動から個有の位相で解放することによって自立することもない。又、大衆自体が自己の経験を統括する事によって知識や技術の自然的展開を無化することもない。

私達にとっては、宗教から知的過程を解放することに基軸がある訳ではなく、知的過程を階級的に疎外する現実的基盤から解放することである。前者は後者の前提ではあるが、後者は、普遍概念として、人間の△知的力▽を個有の力として共同幻想として疎外しない究極のウィジョンである。

私達は過渡期としての「大学闘争」を総合的な想像力の解放として、大衆の日常生活圏の具体的判断(総括)と△知識▽の啓蒙性の矛盾と逆立の表現を徹底的に組織することこそ問われている。そのようにあらわすことの出来ない部分が存在し、それを支える時代の

り必然の受動性あるいは不可避性の根柢に構想力のレベルから総体像の提起を為していかなざるをえない位相での現実性をどのように措定しうるのかということとして。この二様のあらわれ方は、選択された△場▽の特定性に規定されつつも同在の矛盾をかかえ込まざるをえない。前者の側では、従来から自明なものとしてあった身体行為レベルでの実践展開での個々の△表出▽の再検証を自己に強いつつも、選択した場での具体的対応に合わされる関係的距離の回収基盤の水準として、後者の側では、斗いへの感性的契機が時代の△指示性▽においても存在の△全体性▽をさし示す位相においても拡散や解体を強いられており、そこでの構想力レベルからの再構成は限りなく政治表現からの逸脱ではないのかという焦慮として。これらの個々の側で恣意的な切実性を現出しつつも、情況的なものといえるしかない主體的時間構成の困難性は、実践概念—構成の転換の要請を必然化させてきただろう。その意味で表現の位相は動態的展開の裡で把握されるのである。そして私達は、実践概念の転換—表現の連続性を△学斗▽の構成条件、課題とどのように関連させて再構成しうるかへしほり込んでいかなければならない。私達は斗争課題の表現された結果の連続性としてでなく(このレベルでは表現主体の現存性は表現された時点で逸脱していくほかない)、日常的実践展開の過程それ自体を経験の対象化として内容を再構成していくことが重要である。

具体的な課題への対応を現実的に強いられていく側面からも、大学批判の総合的ウィジョンの構想から△現実▽(大学共同幻想の変容過程と、現実の大学の構成転換)へ向かう側面からも浮上してくる壁は、大学斗争を着地させるべき政治的、社会的表現の低滞の苛

立ちであり、就中学費斗争以降のA表現面Vでの構成が明らかにし
えていないこと、その模索において同様である。ここで問題は今、
大学斗争の対象化作業（表現の位相がどのように現実性を獲得しう
るか）がどこまでの射程と回収基盤を明らかにしようかである。だ
からこそ、まず表現の位相（抽象の度合）の現実的契機を以下の前
提を踏えたいと確定していくべきであろう。一つに大学斗争は端
的にいつて幻想の構成転換として問われるというのを、学生存在
のその観念的・日常的・自然過程の自己矛盾の裡で把え返すこと。二つ
に個的モチーフの展開という恣意的自己表出が、徹底して個体の原
理と共同性の原理のせめぎ合いのうち強いる現実性を明らかにし
ていくこと。比喩的にいえば、文学表現と政治表現の差異性を、表
現の意味と価値において把え返すことといつてもよい。これらのこ
とから一定の抽象を為すとすれば、表現の位相は、概念構成の抽象
性と表現構成の現実性が交差する帯域の拡がりにおいて測定される
といえる。このことは概念が純粋化されていくことと、表現が具象
場を介したときの個別性と表出の総体性との分裂との乗離自体を自
覚することからはじまる。さらに表現—沈黙の内在的根拠とどう対
決するかを問うものである。

このことを押えた上で現在どのような形態であれ個別大学斗争を
持続、実践している部分は、そこでの課題の連続性を以下の視下か
ら検討を加えてみる必要性がある。

(i) 結果としての外在的展開の連続性は、現象それ自体の内在的展
開の不可避性とのように連環しているか。このことは斗争の持続
の根拠とA表現Vの位相での内在的根拠の連続性をどのように押え
ているかを問うていくのである。つまり斗争主体自身の位置を客観

的に明らかにしよう他者との関係的距離測定の裡に現実的回収基盤
を指定するというのである。

(ii) 外在的契機の仮象性は、情動的—存在の核の垂鉛の側から強い
られる内在的回路の個別的、局地的表出をどのように総体的実践の
側へと開示しようか。このことは斗いが孤立化しつつも持続してい
るとき、時代性の判断の不可避的な内在の客観性の位相で明らかに
していくことに向かうということである。

これらのことは、現下の大学斗争—学生存在が突きあたって
壁を、大衆の沈黙の水準の深化と大学共同幻想の構成転換を構想す
ることの困難性の裡に把握するならば、現象面からの必然的検証回
路としてあると考えられる。いいかえれば、主体の選択された斗争
のA場Vで表現されるA理念・形態・主体Vに於ける主観性として
の恣意の位相へ時代性を介した判断により跡づけられていくという
ことである。現在の大学斗争は、個々の大学の宗教性、理念性を
粉碎するというそこの固有な問題の現位相の変容と、そこの自
然的な個別的な諸条件を離脱していく水準の時代判断との同位性の
うちに平準化されているといえる。私達は、このことは表われ方を
異にしていようと学斗の自存構造の根拠の問題へと収斂していく日
常構成の水準と位相を浮き上がらせていると考える。それ故に私達
は現段階の大学斗争—学生日常に於ける表現の膨化、拡散と、関係
的距離の解体状況それ自体へ確執していくべきである。

(2) 大学問題の自体的問いの検証

大学問題は、A知V的過程の内在的転換の内容の水準として不可

避的な時代性を介しての判断構成として積極化しようか。このとき
の問いは、大衆運動の内在的展開の水準として対象化せんとすれば、
どのような実践構成として連環しようか。ここでは現段階の学斗の
水位から逆照していく形で、幾つかの仮設を立てて検討を加えてみ
ようと考ええる。

(i) 大学斗争の問題は、学生運動の課題であるという自明性自体を
どう再検討しようか。

(ii) 社会運動としての学生運動という場合に、實際上社会の現実と
どのような位相で激突したのか。かつ組織しえたか。

(iii) 学生日常（観念的日常）の抽出と大学斗争の位相は政治的構成
の位相と、学生日常と大学斗争の自在構造の固有性の位相どのよ
うに組織が可能であるか。

(iv) 学生運動に於ける大衆的契機のくり込みの内実の側面でのオル
グと、政治主体形成の党派活動の位相でのオルグは分離して扱うべ
きではないか。

これらの諸点の検討は、現下の大学斗争の閉塞状況に対する表現
の位相の準位があたかも大衆運動へ結実させていく方途に於いてあ
る断念をもって構成されていることに対する意欲的、意志的再構成
の客観性の評価に収斂させていくものとしてあるといえる。

まず、大学斗争の問題を学生運動の課題へ収斂させていくこと自
体の検討はどのようなあるだろうか。このことは二重の意味を浮び
上がらせている。一つは、大学斗争—学生運動というタームに労働
運動とか他の諸階層、当事者運動とか、さらに全人民的政治斗争へ
の引き上げやの接木を誘発するということ。他の一つは、大学斗争
が反体制主体的基盤を前提として歴史的に荷担されてきたという先

験性に対して、外在的に接木されたものとしてでなく学生存在の自
存しうる帯域において学生運動を構成しよう。ということ。前者の
位相は、古典的政治概念の呪縛の内にある諸党派・大衆活動家部分
が踏襲している定石である。私達はそのことから全的に自由でない
としても、後者の位相での自体的問いへの内省を問題にしていきた
いのである。だが私達は、具体的実践の経験的抽出の内在力が、斗
いの方向性をさし示しうる射程にしほり込める限りでの言及にとど
めたい。

大学斗争の自存構造の位相を問うる切実性は、自己と自己自身
との関係の歴史的累積としての自己思想の水準に規定されたA学生
存在Vの内容がどれほど現実性を強いているかのうちにある。つま
りこの国においては、自体的問いを発しない通念があり、経験的領
域では格別の不自由をきたさない感情が流通しているからである。
この国においては、A科学Vの対象となりうる条件は、すべて先験
的なものとして外来的であることにより、A宗教的潤色Vの母班を
免がれがたいのである。自己検証回路を自己対象化することに対する
無知としての尖端性への同致と、嫌悪としての土俗性A着地するほ
かないからである。とりわけ知的過程のそれはこのことをもつとも
端的に表現している。A表現面Vでの構成はまずこのこととの対決
としてある。また、学生存在の内容は、自己のA身体Vへの関係づ
けと了解の系がある原基また座として体験されるA空間VとA時間V
を獲得するAアドレッセンスVの特異点にA表現Vされる。このレ
ベルからみるならば、大学斗争をA学生存在Vの自存構造の内容の
水準として扱おうかどうかは、A身体VがじぶんのA身体Vを了
解するとか関係づけるとかいうことの仕方にかかっているといつて

よい。そのことは原理的にあらゆる了解の系とあらゆる関係づけの系の原基あるいは座としてA身体VがじぶんのA身体Vを了解し、また関係づける仕方を位置づけられるかどうか規定されていることによる。

自己と自己自身との関係の歴史的累積としての自己思想の水準は、AアドレッセンスVのA時間VとA空間Vの獲得された特異点のA場Vに表現を引き寄せている。さらに人間と自然の関係の歴史的累積としての共同性—共同体の水準に憑かれている度合からの解放度において押しはかられる。このことから学生の観念日常に於ける現実の準位へ向かう。それは学生の生活過程に於ける段階や位置に規定された、そこに対立する家族、他者、社会、国家、自己自体との諸契機が、どれ程現実性を強いているかの水準といつてよい。さらに、時代性において存在が不可避とする社会的幻想の表出の内容と、その現実性の判断を問うことへ向かう。これは自己幻想のA表出Vの連続面において水準的である。これらのことにおいて私達は、今日の大学斗争の事象が学生存在の反体制運動の主體的基盤と、ここにダブらせて可能とした自己形成の核の解体をさし示していることをみていける。現在の大学日常が、学生にとつての観念的、知的（政治的、社会的）敵役としての存在を変容させていること、その社会の矛盾がもつとも先鋭化されて、ある象徴の水準を同時に変容させていることを相補的にさし示している。私達が「社会運動としての学生運動」として提起した内容は、この先の徹底化として総括されてはじめて現実的になるといえる。つまり社会の現実の理念と現実性のあいだの亀裂にどのように対応しえたかである。学生の社会的現実、生活者大衆が日常的に接している現実そのものと

とする側からではなく、A事象Vの出自、背景をA科学Vの対象として検証しうる客観性の根拠の側で、A知Vの過程を自体的に扱いる度合に応じて、学生運動の課題たりうるといえる。つまり、現段階では学生運動などという先験性は根拠を有しえないということ徹底化させていく位相において逆説的に学生運動が成立しうることとを自覚すべきである。その意味でそこでの課題はすぐれて社会的な問題であるといえるだろう。

(3) 制度化された知識から 恣意としての知識の解放へ

科学知や技術知が合理性の最高段階の仮象であることと、科学知や技術知の淵源が古代の占星術や錬金術に押えられることに、私達は価値構成と技術構成の問題が自然過程の不可逆性の側で準位づけられていることを象徴化しうらる。私達は科学知や技術知の不可逆性の累積がどこまでも客観性の根拠を深り出すものであるという先験性、神秘性から解放されるべきである。科学知や技術知が人為的構成として限りなく究極の総体像をさし出し、実証されようとも人間の存在の全体性に対してはやはり部分性として徹底して扱うべきだからである。ここにおいて、私達は人間と自然の関係の歴史的累積としての共同性—共同体の水準に規定されたA知識Vの内容に向かい合う、私達は、人間にとつてもつとも根源的な課題は、人間自身であること、人間にとつてもつとも自然な課題は恣意の問題であることを徹底化すべきである。恣意の問題は、あらゆる事象を人間の対象として扱いうる像を喚起することにおいて—想像力に

は言い難い。私達はA事象Vの問題としてではなく、A類Vの本質の位相で学生の社会的現実を扱いたい。つまり学生存在に於ける社会の現実はそのレベルで現実的であるからである。人間の存在本質がA類的生活Vの仕方にしかもとめられず、かつ考えるかぎり、人間にとつての境界は、不断の働きかけによる現実の生活過程にあらわれるA自然Vだけをみるのではなく、幻想の生活として具体的な日常から逸脱していくが故に、構想力によつてしか把握されないA全自然Vまで意味しているのである。この位相においてA労働VやA経済社会構成Vやが非有機的A身体Vの核として登場していくのである。こうしたレベルで学生の社会的現実を把握すべきなのである。そこから大学斗争は、自己と自己自身との関係の歴史的累積としての自己思想の水準に引き寄せて時代のA指示性Vを表現しうらる。また、時代のA指示性Vによる共通の体験を共有化しえた水準は、時代の指示性の喪失の空間においても、その共通の体験がいつも一定の水準で、共通の観念を喚起していくために自己思想の水準自体に共同の観念が付着していく地続きの構造に出合うことになる。このことは、斗争自体のA事象Vと時代のA指示性Vとの関係づけが一義的でありえない状態を示している。さらにAアドレッセンスVの特異期にA表現VされるA時間VとA空間Vの獲得が、存在のA全体性Vに架橋しうる回路に接続できない変容を蒙っていることをもさし出している。このことに対しての無知や嫌悪の表出は、現下の内ゲバや爆発テロの様相において情況的—時代的であるといえる。そうした意味で私達は、大学斗争の問題を学生運動の課題としてあるか、という自体的問いを次のように収斂しうらる。すなわち大学斗争が、A事象Vとしての、A制度Vとしての学生存在を主体構成

において宗教からの解放と宗教の自由との混同を自覚的にはじめて立てられるのである。その意味ではA自立Vの問題の喚起として積極的に擁護していくべきである。知識や技術が先験的に受授されていくということは、もつとも自然なものとしてある恣意の側で黙契や禁忌を解いていくというよりも、宗教的潤色の連続性の側で哲学が神学から解放されていく位相での自由度としてあることを示している。歴史的に累積された地上的利害としての黙契や禁忌から解放を恣意の側で立てるならば、個—対—共同性の関係構造において解かれるしかないからである。知識が共同性に憑いている限り、個や対のレベルでは無縁であるか関心事であるかにすぎないので、そこでの地上的利害は天上的救済としてしか解放されえないということである。その意味でも、人間にとつてもつともラジカルな課題は、人間自身であるという自覚は重要である。このことを拡張してみれば知的構成の究極像は、神学と哲学との対決として想定しうらる。そして哲学の問題の究極像は、共同性原理と個体原理の対決へ到り着く他ないといえる。知的過程に対する個—対—共同性の問題は、大衆の知的過程に対する宗教的潤色からの解放の度合として積極化させて再構成していくべきである。

知的過程に対する、共同性—個、対の逆立構造を表現の位相においては過渡的概念と普遍的概念の時間抽象の度合で再構成していくだろう。そこに歴史的現存性のA度Vを想定すべきである。これらの問題を+学日常の現位相と現水準に引き寄せてみてみよう。大学日常は、A知識Vの関係としての、人間と人間との関係（社会関係）としてある。A知識Vが時代性から蒙っている変容条件が、大学日常の内部、外部関係を規定している。大学日常の内部で

は、 \wedge 制度Vや \wedge 共同幻想Vに系累化された \wedge 知Vと、それに対する大学構成員の關係としてあり、外部ではそれと \wedge 大衆Vとの關係としてある。知的過程それ自体は、 \wedge 特権性Vでも \wedge 非特権性Vでもない。ただ、知的過程の自然過程としての自己矛盾の解消の位相と、知的過程自体の消滅の位相の問題において核心的に問われると考える。知的特権や知的優位が社会的特権や社会的優位としてすり換えられるのは、 \wedge 制度化された知識Vの位相での問題である。それ故にかつて吉本隆明は、大学斗争の政治的課題は、大学の制度的な改善の具体的項目の獲得にあるのではなくその背後の感性的な要求の自覚性に求めたのは正当であつたといえる。私達は、ここでの感性的契機のせめぎあいを、自己(内)倫理の共同化の排跪へおとしこめた大学構成員の総敗北の位相と根源的に対決しなければならぬ。また制度化した知識を大衆が受容していくのは、クレーバーがいう \wedge 支配の正当性Vの客観的根拠をプロテストスタンティズムの倫理で裏打ちされた所有観念に仮託しているからだと考えられる。だが、この国においては、アジア的貧困とヨーロッパ化された近代的所有の二重構造を \wedge 観念の運河Vとしての天皇制のもとで累積させてきたといえる。その意味では、大学における \wedge 知V的過程の自存構造は、大学構成員(教授研究者、学生)の自己宗教としての天皇制的なものとの対決と、社会構造分析をナショナルリズムと共同宗教としての天皇制的なものとの関連において為すことで構成しなければならぬ。ここでの闘いの持続と絶えざる実践を通すことを通してのみ感性的成熟を外在的なものへの接本としてでなく、あくまでも対象を対象自体として扱ひうる個体原理の恣意性の回路への道程を歩みはじめることが可能となるであろう。そして私達は、そ

に縛られ、世代の確執のみがもつともリアルな世界であつた己れが、それから解放されて自らの世代を作るといふ契機をもちえた晴れやかさといつたものである。しかし、これは自己による解放ではない。 \wedge 他者Vの観念が家族との一時的關係に封殺されていた自然性が自然年令とともに放出させたというにすぎないのだから。自力で解決したわけではない。が、家からの解放感是自己の前にはあつた可能性があるが与えられていると思うことに、ほとんど歯止めをきかすことができない。しかし不幸なことに現代では、このことも一瞬の出来事としてしか自己にありえない。あらゆる可能性などを与えられるほど社会の側でも余裕を失っているのだ、一気に早熟することを強要されているのだ。「さて生きよう」と思つても生きるに価する現実などどこにもないのだし、だからこそ社会の秩序にラジカルに順応することで実存のリアリテイを得る逆説が通用する余地もなくなつているのである。あらゆる先験的なものは死語と化しており、また自然のふところはいだかれといつた幸福すら、自然の壊死によつて阻まれていゝ。「何処に行こう」としているのか?という問の堂々めぐりの性格に言ひようのない徒勞感にさいなまれていゝ。自己は何故に自己であるかと問う以前に私たちは性格を喪失してしまつており、沈黙はますます膨化するばかりである。それほどにも性關係共同關係に対して自己をきわだたせる自己準位を得ることは困難である。自己關係と自己了解を統括するバランスが失なわれていることは、望むと望まざるとにかかわらず早々と死に直面せざるを得ないといふことである。このことが意味していることは特定の対や個が国家―社会から總体的に疎外されているといふことであり、私たちの生は眞実をもちえず、単なる事実の断片になつていゝことであ

のずっと先で例のマルクスの言葉に出合うだろう。現実的な個体的人間が抽象的な公民を己がうえへ取り戻し、個体的人間としての彼の經驗的生活のなかで、彼の個人的労働のなかで彼の個人的境遇のなかで類的存在者となつたとき、人間が彼の「固有力」(forces Propres)を社会的な力とみとめてこれを組織し、したがつて社会的な力をもはや政治的な力の姿において己れから分離することをしないとき、このときにこそはじめて人間解放の成就があるのである。

「ユダヤ人問題のために」

大学像の解体と転向の根を撃て

高見沢 洋

学園闘争が全国を席卷した時からすでに五年もたち、新しく大学生活を送るものたちにとつて、遠い過去のいき事としてしか痕跡をとどめていないことである。キャンパスを春の微風をうけながら歩く姿は明るく、平穩そのものである。しかし顔は、希望にみちているとは決して言えないような気がする。ただあるのは、家の規範

る。かつて吉本隆明が「学生は宙吊りにされたインテリゲンチヤである。」と述べたが、その宙吊りを維持することが大学に知の特権の唯一の延命の道であり、社会の現実には宙吊りにさせるほどの余裕を持つていない。自己は何故に自己であるかを問う前に自己を奪い去る現実があるのだ。国家や社会は他人に自覚症状を与えることなく死を所有しようとする腐臭に充ちている。私たちは常に死に魅入られ、所有される懸崖に立たされており、墜落を防御する手段はどこにもなく、ただ防御しようとする。しかし手段は唯一の手段である。私たちは死を所有しようとする。しかし手段は唯一の手段である。私にはいかなる変容を余儀なくされるのか。このとき私たちは情況そのものであり、この不可避性にどこまで自覚的でありえるかが、時代にとつても私たちにとつても何ものかでありえるのだ。では私たちはこの現実の中で、どこに行かんとしているのか。タブーは一つある。自己の存在の出口を先験的なものに根拠付けないといふことである。さてこの文章は次のことを意図している。大学の共同幻想を内在的にあつかいつつ、社会の本質に对应付けられる位相をあきらかにし、大学解体にはなにが不可欠であるかをあきらかにする。そして、主体の危機を表現の位相からあつかひ、今日的な主体の有り様を追求した。

序

昨秋、ほとんどの国・公・私立の大学で学費値上げが発表された。ブル新に「粉争」の再来の予告はまったくはずれ、裸にされた

のは足腰が立たぬほど衰弱してしまっている主体の有り様であった。また闘いらしきものがあつたところでは一様に少数ヘル部隊が、当局の裏切り・責任転嫁論による型どおりの占拠やストをし、後期試験において終息するというパターンであつた。私たちもこのパターンから自由であつたわけではなかつた。このパターンでは何事も始まらないという認識がありながら、次のような経験をすることで私たち自身傷ついたのであるから。

それは、大学の幻想構造、それを補完する左翼の理念に闘いを強め、大衆の自律的な表現の回路の創出に専心しながら、具体的大衆が現前したときなすすべなく棒立になつてしまつた！大衆の貌が底深い闇に変わり、発語はそれに吸いこまれ、残つたのは胸苦しきまでの私たちの貧困という事実であつた。他者との認識の優劣において傷ついたのでない。大衆への思い入れを深くせんとした自身自身に傷ついたのである。私たちのこの経験はまったく認識を新たにせねばならぬという強烈なものであつた。何故なら、他者との関係において何ら共通の感性となつて連続化することもないにもかかわらず、関係が続く！続けることは怖いことではないか。しかし、何故それが怖いといつた認識に行きつかないのかというとき、私たちは日本における宿痾といつたものに直かに出会つてはいるはずだ。私たちは徹底して孤独であるにちがいないにもかかわらず孤独の認識といつたものがない。

それは、農耕の社会の支配的な理念の構成が、村落の個々の大衆の幻想は共同幻想としてしか疎外されない自然宗教的な遺制の強固さによるといつていい。知的過程に必ず自然宗教がはりついている。キリスト教的な \wedge 神 \vee があらわれず、 \wedge 自然 \vee があらわれるのは私

じめねばならない。その間にこたえてゆくことはとりもなおさず今日の大学の危機の本質を照射するはずである。

現在私たちが大学にみているのは、宗教的な大学共同幻想が時代の共同幻想の構造にくりこまれつつ、しかしその理念は死なずにいるという状況である。前者は戦後国家の構成を経済構成体が疎外する抽象の水準に土俗性の抽象を接木する方法を放棄し、土俗性の抽象の核を拡散させつつ経済社会構成体が疎外する抽象性を高度化する側に憑いたことと相即である。つまり、生活の疎外する幻想と最高次の抽象としての民主主義との遠近の操作に支配の根拠を置いたのであり、そこから逸脱する余剰は単なる恣意的な倫理の問題に陥落したのである。

共同幻想の拡散という事態は国家の遠近操作が穿つ空洞が大衆の裡に内面化された事態をさしている。そのことは大衆にとつて大学の宗教性は単なる恣意以上のものでなく、大学は社会に入る際の有効性以上の問題ではないということである。このことは次のように言いかえてもよい。理念としての民主主義がその核におしかくしていた宗教性がそれに対応する関係意識を何処にも見出すことはできなくなつたということである。

このことの意味は、共同幻想が消失したことを意味しているのではない。共同幻想は自らの存在主張を自らの身体的質料を徹底して削ぎ落した等質的空間としてしか主張できなくなつたことを意味している。しかし、これは共同幻想の歴史的構成としては矛盾そのものである。何故なら、共同幻想は個々の人間によつてうみだされたものであるにもかかわらず、個々の人間の営為という結果は跡かたもなく消し去つてしまうことであるからである。ここでは何ら人間

たちの知の敗北過程の常識である。このことは、自己の出自の根拠を先験的なものにおくことを物語つてもいい。私たちが大衆を前にして棒立になつてしまつたとき、やはりそうした \wedge 自然 \vee が頭をもたげたのを感じた。しかし、認識を新たにせねばという思いを強烈にしたのは、今や \wedge 自然 \vee は明瞭な輪郭をもつてはあらわれないということである。日本の共通の感性として前提化してあつたものがたしかにヒビ割れて露出してはいるのだ。

私たちの判断も単なる恣意的事実にすぎないという現実に晒されたとき、やはりそれから自由ではなかつたという想いと、認識を新たにしないことには私たちの現存性を積極的に根拠付けることは出来ぬという危機の認識に至つたのである。そして、この危機の認識は、現在の知的過程や生活過程における危機の様相をも物語るはずである。この地点において私たちは大学にかかわるのである。現実存在すべくもない理念としての民主主義が残存したのは大学であつた。それが解体に瀕している事態は社会における目詰まりを象徴しており、かつ戦後の理念や認識や範型の解体を象徴している。

このことは私たちに、前者が大学の場の解体を社会との現実的契機との関係において本質的に扱うことを不可避とさせており、後者は大学の場を介在させている政治的問題を対象として扱うことを強いているのである。

〔I〕 大学共同幻想の構造と推移

宗教的な大学共同幻想が存立しえた根拠とは何かという問からは

の倫理や反倫理という問題は、あらわれない。共同幻想に向う特定の個・対が表出する幻想は単なる恣意的な内面の問題にすぎず、等質の時空を介在させるときにはその特殊性を自己解体させてしか、かかわることが出来ないからである。であるが故にまた部分的な土俗的なものに過剰に憑くことを露出させているのだが。

つまり私達は次のような象徴的な事態に立合っているのである。政治的世界では言葉で行為をつなぐこともできず、行為で言葉をうみだすこともないという表現と行為の隔絶という事態である。言葉はどのような意味でも身体行為を根拠付けることはできない。言葉の位相の独自性でなく、 \wedge 浮遊 \vee しているという事態だ。又身体行為も言葉にとどかないまま未完結に終らされている。このような存在の破瓜が情況の総量である。しかし、不都合なことに私達は個・対の表出！生きることを止めるわけにはゆかね存在だ。歴史の抽象として人は概念を生きたるほかないが、個体史としては凹凸の烈しい果實的空間を生きたるほかないのだし、特定の個・対としても等質的空間からはみだして生きるほかない存在であるからだ。

ここに至つて私達は国家の危機をみているのである。つまり現代国家の構成が個々の表出を解体して繰り返すことで成立するのであるが、国家の純粋化にこそ国家の国家たるゆえんをおいているのであるが、それは個々の表出！生活過程の疎外する幻想を繰り返すこととは排中律であるからである。国家は自らの出自の根拠を人為的な純粋化にも自然性につくことでもなしえない地点で性格を喪失しているのである。そして、今や国家は自らの身体的質料を削ぎ落したとき、後に残るのは事実の集積を唯一の価値とする制度である。そしてさまよえる国家の宗教性は社会内部に残存する土俗的幻想に

固着してしか主張することが許されていないのである。否、そうした土俗的幻想も農村の都市化という現実とその基盤を喪失しているのであるから、ノスタルジアとして自らの箱庭に農村をつくることによつてしか主張しようがないのだ。このことは私達に革命の不可避性と不可能性という問題を象徴させている。

ここにいたつて、大学共同幻想の危機は自らの幻想再生産を宗教性に求めることを放棄する他かないことと、しかし、宗教性を放棄してしまつたら知の制度化も消失してしまふといった矛盾を象徴しているといふことができる。

① 宗教的理念のみでは、もはや大学の「場」自体に観念的日常統括としての大学共同幻想の自存的再生産の条件を保障することは不可能である。

② いかなる体制においても「学問・研究・教育」の独自性と社会的責務があるといった社会的・経済的価値に存立基盤と大学像を求めている。これは戦後支配層の側からと戦後左翼思想の側からと二重にあらわれた。

③ 大学の宗教理念の転向と変質は、ひとつは知や学問の特権性—社会から独立した価値という、危機を制度的枠組の強化によつて保償しようとするものと、他方は研究を分離して大学サービス論にゆきついた。

④ この間の矛盾を統括不能であるが故に、大学の宗教理念を儀式や祝詞的位相で接木させながら、他方そこからみ出してゆく幻想に対してのプラグマチックな管理制度の強化がある。

以上の四点に大学の危機の現象はつきるように思われる。危機は制度がそうであるというのではない。「学問・研究」の独

一義的に結ばなくてすむような段階に至つて、国家から相対的自由になつた解放度に西洋の大学理念を接木することで小国家を形成し、「文化・学問」の官僚主義を定着させたといえる。

これらの問題は、農耕の社会的疎外する宗教性の、支配的理念まで精華した天皇制と、社会の文化的・観念的上層との関係である。

日本において、土地の私有化意識は血縁的共同性の構成転換から分割された自己意識として生まれたのではなく、文化・観念を専守する部族共同性の上層間からおこつてきた。つまり、地域的な生活思想の核として、本来的に自己が生みだしたものではないものを、強固に自己のものであるかの如く錯覚する、いわゆる日本の事大主義を想定できる。この錯覚を組織することに天皇制の幻想の構成があつたのであるが、この錯覚の構造が象徴しているのは次のことである。

高度の農耕技術・文化が首長層によつて外部から輸入され、その「文化・技術」と下層の大衆の生活との隔絶の時間落差を支配の力量として、専制権力として存在せしめた「観念のアジア」の構造である。

大学の宗教性は、以上の観念の古層を近代的な相貌で蘇生させたものであるといふことができる。「文化・技術」がまず先験性として存在しており、その取得が何ら大衆の生活過程には回収する方途を持ちえぬままに文化的特権性として昇化する構造である。そして、この構造の内に構成される日本の知識人の宿業といったものは文化の先端性と土俗性から二重に疎外されて、何ものをも自力でうみださず大学人であることや、知識を私有することが人格的価値になつてしまうことである。「文化」の二重性の構造が人格とし

自性ということ、「文化・技術」は資本の価値増殖過程、生産過程における労働過程に繰り込まれてはじめて一般性を得るということとの間に介在する矛盾を、既存の大学の宗教的共同幻想では包括不能であるという幻想の「場」の内在的矛盾として危機であるのである。

では、何故に大学は宗教性を近代日本の過程でまつわりつかせる他なかつたのか。何故に大学自体のなかに宗教性が存在したのか、あるいはするののか。という問を自からの内部に発してみなければならぬ。何故なら、大学自体のなかに宗教性をはらむという根源的位相が解かれなかり、私たちはその呪縛から自由にはなれないからである。

① 観念的上層としての「文化・技術」が大衆の生活現実と隔絶していること。それはまず生活的現実の矛盾を本質的に解く以前に人間と自然との一次的な対象化関係に呪縛されてあるが故に自然宗教に人格性をふきこんだ地域的共同性としてしか疎外されるほかない。つまり農耕社会における特定の個・対が社会に向う幻想は共同性としてしか疎外されないという、此岸にある矛盾の解決の断念のうえに、自然に呪縛されて貧困である自己を救済する願望の対象と宗教として疎外するほかない位相で「大学」や「文化・技術」が共通の夢として願望の対象として呼び求められたのである。

② 日本の官僚主義と表裏一体の問題である。日本のインテリは資本主義が国家により育成されたこととパラレルに人為的に作り出された。このように形成されたインテリは、あらかじめ創造との関係大衆の生活の生産との関係とは断たれている点で国家を頂点とする官僚主義をうみだした。そして、「学問・研究」が国家的要請と

て存在しており、それにくりこまれて個々ははじめて社会性をもちうるという倒錯である。

現在、大学の宗教性の核は拡散したといえるが、宗教性が消失したというのではない。何故なら依然として「文化・技術」が先験的である存在の構造が止揚されていないからである。このことは、この構造が止揚されなかり、その理念的転倒を目指す政治的位相が根拠を有することもある。

戦後民主主義者の陥るはこの構造に対する無感覚—無知にあつた。「憲法」や「教基法」に固着する理念としての民主主義はこの構造に構成される時代的な共同幻想の内部に包括された恣意的解釈以上をでるものではないからである。大学の問題が「憲法」や「教育法」の理念から逸脱していることにあるのではなく、「文化・技術」の先験性への宗教的帰依の問題としてあるのである。教育の機会均等は、「文化」の特権構造を大衆の間に引き渡させたのでありこの拡散過程が大学の宗教性を後景に退かしたと言ふことができる。大学人、及び戦後民主主義者は自らが石女であることを恥じさせなかつた宗教性が拡散するのに対して、理念性を自由的政治的国家的水準の宗教性にすべりこませることで石女性を制度的に補償せんとしたところに、戦後民主主義の転向と変質があるのである。

では制度的に補償するとはどのような意味においてか。資本制社会においては個々の文化の創造は恣意的であらざるをえないが、社会的総労働という一般性に自らの席をみだしてはじめて社会的特権性を求められ、この構造の人格化の身体的属性として制度がうみだされる意味においてである。そしてその理念を国家が保有する宗教理念に憑かせたのである。

さて、大学の共同幻想の構成の危機は、自らの存在根拠を制度的に確定することが、自らの宗教的共同幻想の再生産を放棄することによつてもたらされるといふ逆説にある。かつては文化・技術の先験性は宗教性に潤色されていた。そうであるが故に、資本の価値過程—生産過程と相対独自として仮象の理念としての自由を貧ることのできた。今や、自らの手で仮象としての自由の理念を扼殺した戦後民主主義者は、理念として高度資本主義社会に憑いたのである。ここでの文化・技術の先験性は、社会的有効性の分配カルテルに適合した「制度化した知識」としてのみ自己主張するほかないのだ。大学の構成された場の危機を逃れようとする象徴的な問題として、現在、大学移転があることに私達は注目せねばならないだろう。

① 「文化・技術」の先験的構造は都市と結びついていた（公共性）大学の共同幻想の再生産は「都市」を放棄してはなしえないという矛盾である。

② 大学を社会にとこまでも照応させるとき決して宗教的理念を手放すことができないことの矛盾。

①は、「都市」が「文化・技術」の先験性であることを象徴している。都市は、居住性が自然と無関係にえらべるものの上に、外来の高度な「文化・技術」を取得し専守することが権力であるという公共性が接合されて自存的契機をつかんだ。そして近代都市以降の問題は「都市」が自然性の呪縛からの解放であると同時に人々から対象的自然や生産手段をうばいとって、無所有者として晒していることを何ら止揚しないこととの矛盾としてある。

たとえばこの矛盾の極地は「居住性」や「遊び」にあらわれているといえる。「居住性」を一切土地と結ばないし、仮構した（人為

的）土地にも結びえないことは、自己の来歴をどこにも根拠付けられない観念の遊民としてさまようことを人々に強いている。子供は「遊びの」想像力さえ完全に収奪され無機質な押しつけがましい官制児童公園に封じこめられている。

これらが象徴している情況の意味は「都市」（人為性）へも「農村」（自然性）へのいずれにも幻想を求めない地点で混迷を深めているということである。ここでも私達は最終的課題に行きついでしまっていることを確認することができるのだ。大学の幻想構成の矛盾もこれとまったく等質なものとしてあり、ただ都市が公共性を放棄していないという点においてその公共性に憑いているのである。大学が「都市」からはなれるのは矛盾である。したがって場所の移動それ自体のことより、観念の「都市」をいかに仮構できるかということが自然環境や施設に結びついていることが問題なのだ。

私達は都市が公共性を放棄しない構造（都市の「夜」を前提としたところから何ら具体的に生活している者たちに回収できぬ公共性の矛盾を、現代版隣組制である「地区コミュニティ」作りや「住民参加」で埋め合わせることをいいたす革新自治と同質に、大学が「文化・技術」を自然性へまで回収する回路を先験的に断つたところで生起する矛盾を機能的に埋めあわせるとする姿をみてとることができるのである。

もしここでわたしたちが都市や大学の解放像を求めるとすれば、それは都市や大学から公共性を追放することのうちに求められてゆくほかないのではないか。

②は、私たちが管理支配体制と呼称してきた現象のうちにその矛盾をみることが出来る。たとえば中大の多摩移転で争そわれている

のは①の位相についてではなく、「教育」と「研究」の分離する大学の理念の矛盾を、人事権や学部教授会の権限の問題として、総じて大学管理の位相で争そわれている。

〔II〕 大学理念と社会の狭間—学生存在—

大学の場合を介在させている政治的課題をあつかうてゆくとは、大学共同幻想の内在的本質をあつかうてゆくことであり、表現の位相としては知識人をあつかうてゆくことである。大学の場を社会的な現実的な契機からその場の解体を捉らえてゆくことは家族の構成員である個々が社会に向う幻想の位相からあつかうてゆくことでもある。

ここでは後者の立場について可能なかぎりあつかいたい。ではその大学の問題とは何か？それは社会の構造そのものを問うことで労働価値の問題をあきらかにして社会人における「文化・技術」の位相を明瞭にすることもある。究極的な問題は次のように立てられねばならぬ。△文化・技術Vも△労働価値Vも共に個々の現実的諸個人が生活の生産をしてきた結果にすぎないのに、何故に身元不明となつて私たちの前に先験性として君臨しているのか。

『社会的な力、つまり分業によつて条件づけられる種々の個人の協働によつて生ずる、幾倍にもなった生産力は、これら諸個人には、その協働そのものが自由意志的ではなくて、自然成長的であるため、かれら自身の結合された力としてはあらわれず、むしろなにか疎遠な、かれらの外に立つ強制力としてあらわれる。そして、この力については、かれらはその来しかた、行くすがが全然わからず、したがって、もはやこれを駆使することはできないばかりか、逆にいま

やこの力のほうがそれに固有の、一連の局面を発展段階の継起を通過するのである。』（ド・イデ）

『自然としての人間がこちらがわにあるのに、いったん△労働Vとして自然の対象世界にむかうや何故△労働Vがあちらがわに、いかえれば手をくわえた自然（商品）の表象としてあらわれるか』（吉本・「カール・マルクス」）

つまり、私たちは労働過程においては生きた労働として個々のであるにもかかわらず何故に生産過程の結果として社会的総労働として量的にのみ測られるのか。という問いであり、対象化された死んだ労働と、その手段として、資本の生産過程の属性としてのみ吸収される生きた労働との矛盾の裡に大学問題という特殊性を相対化し大学問題の社会的側面への私たちの表現を総体化することを強いているのである。

資本制社会では資本家と労働者は商品の売手して相対しているが労働者はその労働力を資本の価値構成として生産過程にくりこまれてはじめて生活の再生産をなせる存在である。現実のこのような労働者・大衆の社会的な存在の位相からとらえられる大学の△場Vは投資として構成されている。政治位相としては官僚として構成されている。すなわち、前者は「商品化された知識」であり後者は「制度化された知識」を意味している。

資本制社会での「知識・技術」は資本の価値増殖過程に合体された手段としてのみ価値づけられている。そして現実的な労働者・大衆はこうした利害的な価値に就く（止むおえずとも）ほかない存在として社会的に決定づけられている。労働者・大衆にとつては、知的・精神的な作業が価値ある人格を構成するという倒錯を先験性と

してないかぎりにおいて決して「制度化された知識」に期待をかけることはない。

そして現在においては、労働過程における個々の生きた労働に對する対象化された、死んだ労働の支配という矛盾に疑似人性V關係を介在させて解消するイデオロギーの外皮がはがされ、労働者・大衆は資本の価値増殖過程に合体された労働過程の単なる人格として物化した意識を強要されている。しかし人間の存在は不都合なことか？まると巫人になれない存在としてみだしてしまふ。少なくともイデオロギーの外皮をまもって自己了解をさせないかぎり、労働の単なる人格に同致させることはできない。そしてイデオロギーの外皮は儀式が祝詞的な位相でしか存在しえない現在では、「同致」を根拠づける自己了解を放棄したまま、心をむなしくして労働過程に入る以外にないのである。イデオロギーの外皮をぬぎすたのは労働者・大衆のたまたかによつてではない。(ここに能力給に對する労働者の敗北がある)資本みずからが高度資本主義社会に對する為ぬぎ棄たのである。

しかし、このことは、生活思想の位相としては、与えられたものを自己が与えたものであると錯覚する構造が拡散を余儀なくされても錯覚するなら意志的のみ得られるということである。日本の大衆はこの意志的「錯覚」からの解放として下向させる以前に、意志的であることは自己にとつてあらかじめ排除させてある。自然宗教的な生活ニヒリズムを生きているといえるのではないか。何もかを断念しつつ、生きることを止めない観念的日常は歪められたまま意志的に表出するほかない。社会の即時性として強いられる意志は、あらゆる先験的なものを同列において受容するのである。

戦後の大衆にとつて、社会的生産力という等質的空間(規範)を先験的価値規準として自己を測り、位置を獲得するところが何よりも此岸における自己の關係意識の貧困を救済するものとして仮構された。もし現在を停滞社会ということを許されるとすれば、それは人為性が自然性を解放するという仮構に纏った労働者・大衆の自然に呪縛された感性(農村的感性)をあたかも自己の出生の恥として、痕跡をとめぬほど追放することで穿たれた空隙が自己をおいこしたということによつてある。(農村の都市化)このことは資本制社会が強い先験的な規範性が内面化された自己倫理の位相で日常意識が亀裂させられていることを象徴しているのであり、かつ何ら先験的な価値規準たりえない幻滅を深めていることを象徴している。

私たちは今や、過去や出生への進行にまどろんでいる暇なく、早々と社会的総労働に關係付けて取引勘定を強要され、ここに席をみいだしえないものはドロップアウトとしての運命を刻印されてしまふわけだ。しかしドロップアウトを積極化する根拠もつかみ出せぬが故にいびつな屈折を強いられてしまふ。この時個々に歪んだ自然宗教が頭をもたげてる。

現代の恐しいところはこうした自然宗教—生活感情が何ら共通の感性として前提されることなく、単に個々に断絶した恣意性にゆだねられていることである。私たちは社会においてつねに異和的存在である。これを打消すロジックをみださねばならない。社会—關係を止揚する思想や構想においてしかないのだが、それは途轍もないことだと生活感情に回収したロジックの鉄則は「他者Vへの思い入れをできるだけしないということであろう。異和を即物的に遺

ここに「制度化された知識」に對する願望が減衰する根拠がある。恣意的存在としての大衆が「商品化された知識」を現実的に求めたにしたがつて「制度的知識」は後景にしりぞくのだ。大学幻想はここに對照づけることを強いられているわけで、一方では現実の資本制社会にできるかぎり對照し、他方では民主的制度としての公共性に對照しようとしているのである。前者の極に「目的別大学」「専門学校」が位置し、後者の極に「総合大学」「大学院大学」が位置しているという象徴的に行うことができる。

この構造の背後には国家の歴史的共同幻想が地域的矛盾を包括しえないということ、資本制社会では本源的労働過程が商品形態を通して、資本の生産過程として行われるという世界的矛盾との構造的危機があり、かつ先験的なものを恣意の同列に引きおろして受容することを強いられた大衆の存在がある。この社会的現実の危機に對照して、先の構造を構成するバランスから逸脱する要素—学生大衆の観念的日常を、知識人の制度的公共性からの逸脱を規範的に統括するものとして疎外されたものこそ、わたしたちが「管理支配体制」と呼称してきたものである。こうした「管理支配体制」のもので早々と早熟を強いられている学生存在を現象ふうに露呈させているとみれば次のようになるか。

労働過程における社会的労働と個々の労働との矛盾の解消の仕方資本家は上位として能力主義(人為性)、下位として疑似人性V關係(農村的遺制)の幅で選択する。とりわけ能力主義は個々の人格や個性を一切排除し、資本の抽象性に練り込ませた等質的空間(規範)に關係づけた機能としてのみ人間をとりあつかうことである。(これは自然命令は家族問題を解きえないところに根源的矛盾

り過すか飛びこすことは、つる異和を總體的に表出する困難にめまいし、断念の表出として沈黙を膨化させることだ。今や、資本の価値増殖の手段化にラジカルに順応することは反道徳的にさえないなり瞬時に身一点に感じられることに生の全重量が向けられているかのようである。こんなところに学生の先端的感性の位相があるように思われる。社会—国家に向う個と現実的家に向う個とが關係付ける規準をどこにも見いだせぬまま分裂を深めている。この内的分裂からたちのぼる表出が先験性に潤色されるほかない歴史的制約こそ何よりも不幸なことであり、かつこの先験性と拮抗しえぬ知的伝統が私たちを拘束していることこそ不幸なことである。そしてこのことは、この不幸から自由になることが解放の前提であることを示しており、この内的分裂を練りこむことなしに解放像をもつことができなことを示している。そしてこの解放像は自己に對立している先験的な社会価値を個々の生活過程にある構造を介して回収せんとするときの不可避の像として成立するのである。

〔Ⅲ〕 〆情況—存在Vの總體の透視する

主体の回路へ

以上述べてきた結論をまとめると次のようにいうことができよう。『大学問題の本質は、宗教的理念が生み出す「制度V」な大学を解体させることである。〆制度的Vな大学の解体は、大学の内部で〆知識の制度化Vを放棄するか、大衆が大学へ宗教的理念を放棄する以外にない。そしていづれにしても〆政治的V構想をし、宗教的理念の背後にある地域的な生活思想のはらむ現実的矛

盾を、そこに繰りこむ以外にない。』(「吶喊2号」から)

さて私たちはこう結論付けてみてどうしても自己監視を強いるものが残らないわけにゆかない。何に向つて闘うのかということ表現すること、最後の「繰り込む以外にない。」ということが表現の内部で深い断層をうみだしているからだ。たとえばある具象的な場を介在させて、先の結論を実行してみるとしよう。そうすると、発語したり、表現したりした言葉が、一旦表出されてしまったら、あきらかに自分のものではない不幸を感じてしまう。この被拘束性が無言の圧力となつて私たちの上におおいかぶさつており、これははねのけんとするとは悲情な苦痛を強いる。しかしそのような意志のない日常では拘束性は苦痛とは感じられない。ただ、表現意志に規定された沈黙が膨化してゆくといえる。すなわち、表現意志によつて、増々、A伝達Vの欠如、そのA傷Vが深まるばかりで、それを縫いあはせるとどんな言葉も見い出せないのではないかという想をもたらずからである。この欠如や欠落感を根拠付けているものはなにか。どこからそれがやつてくるのか。

それを表現の位相の問題として抽出すれば次のようにいうことができる。学生大衆は総体的疎外を強いられている存在として、表現の全体性を求めてその様に自立する以外にはないにもかかわらず、大学に在ること自体は部分そのものである。それに対して、私たちは表現の位相で総体的存在であらんとする。つまり、大衆の疎外の総体性に対応する表現の総体性を媒介にして、具象的なものを本質にあつかふとするのである。この普遍性であるとする表現の位相はあくまでも客観主義的で、時間尺度は人類史的幅を強いられており、これに対して、具象的場を介して、その現実関係をあつかう

『人間の物質の対象化は、理論的見地からいっても実践的見地からいっても、人間の感覚を人間的にするためにも、人間のおよび自然的な存在の富全体に適應する人間的感覚を創造するためにも、必要である。』(「経哲草稿」)

マルクスが言うように、人間の感覚の歪みを解放するにはそのようなことを不可避としている。しかし、私たちにとつての困難性は、そのような感覚の歪みを自覚的にあつかうとしたら、それは言語によつて対象化するほかにないということであり、「飢えのくびき」がことばのくびきとして円環する」ところにある。このことばのくびきこそ、大衆の内部では表現は即自的に失語であることを意味している。たとえば大衆が奢侈品に憑き、そこでの優劣を競うという笑えぬ現実、自己の固有の表現が社会過程では扼殺されてしまうこと、即自的な表象であるといえる。社会過程内部では表現の自立は徹底して許されておらず、膨化したジャーナリズムがあらゆるものを商品価値に繰りこまんと貪欲にまぢかまえていく。何から何までも収奪して止まぬ現実の中で、大衆は生活から降りようにも降りられぬまま深い疲労を累積させているだろう。ここで、言語を表現する手前で、そのようなことにかかわればヤケドをするだけだという諦めを飼いならすことで日常をやりすごしている。そこでの意識は「類的意識として人間は、彼の實在的な社会生活を確立し、そして彼の現実的な現存を思惟のなかで反復するにほかならない。』(マルクス)すなわち、それは習慣やモラルなどの規範性によつて内部がみだされていることであり、大衆の固有の表現が収奪された失語として、仮死を強いられることに他ならない。

このことは、「ちょうど類的存在は、類的意識において自己を確

とき個体史の幅での表現位相を強いられるといえる。そして、ここで私たちは二律排反的な矛盾を強いられているのを感じざるを得ない。ひとつには、個体史の幅での表現位相の極には、物に引き寄せられた自己をみいだす。自己は慣習とかモラルなどの規範性によつて即自的に埋められており、想像力はタブーとなつてうみだされようがない。他には、人類史の幅での表現の位相の極には純粋概念に縛られた自己をみいだす。ここから「生きたほんとうの人間たちのもとへたどりつく」(ドイデ)回路はあらかじめ断れており、自己救済があつて思想の創造がうみだされようがない。つまり、この極と極との間に介在する関係の構造によつてA欠如Vが根拠付けられている。

このA欠如Vは、「人間の生命の発現がその生命の外化であり、人間の現実化がその現実性剝奪、すなわち一つの疎遠な現実性である。』(マルクス)という現実によつてもたらされていることは疑いようがない。すなわち、人間の本質が、たんなる生存のための一手段に墮するほかに現実があるからこそ、「餓死しかけている人間にとつて、食物の人間の形態がではなく、ただその食物としての抽象的現存だけが実存する。』(マルクス)といった感覚の歪みが存在するのだといえる。つまり、人間の現実の類的な対象が剝奪されるからこそ、現実的に飢えるほかになく、かつ、自己の労働が他者のあからさまの命令の下に繰りこまれていくからこそ、A私的所有Vに支配されているからこそ、即自的には感覚の歪みとなるほかにないのである。この感覚の歪みが社会の現実として不断にあらわれてしまふからこそ、それを対象化し、矛盾の解消へ駆り立てる根拠をもつのである。

認し、そしてその普遍性のため、思惟する存在として対自的になるのである。』ことをまた意味していることに他ならない。すなわち、「人間の物質の対象的に展開された富を通じてはじめて、主体的な人間の感情の富が生みだされる」という表現の価値を媒介させてはじめてことばが生きたところへ突出することが可能となるのである。

しかし、錯誤してはならないのは、表現の価値は決して先験的なものではないことである。すなわち、日常を律している規範的意識に違和し、そり返つてゆくことだけでなく、それを自覚的に自己表現しようとするほど存在をくみつくせぬ言葉の不自由に直面するところにこそ表現の価値が想定されるのである。このことは決定的に重要であると思われる。なぜなら、私たちにとつて、現実関係における失禁感や欠如感といったものが、自己の人間の本質が疎外されている現実に意志的に深くこだわるうとしてのみ、受動的な苦悩として感じられるからである。そして、そのような苦悩がもし私たちの内部で感じられないとしたら、主体のどこかにある欠陥をかかえていることを意味しているからである。

このことを情動的な問題として敷衍すれば、存在の欠如を痛覚させない情報社会につきあたるといえる。社会的現実では、言語は機能的で合理的であることのみ価値を有し、言語の指示性の内部から、徹底して自己本質を追放し、記号化を強めている。すなわち、「動物的なものが人間的なものとなり、人間的なものが動物的なものとなる」人間本質の疎外の境地が現出しているのである。もし、私たちが、無感動、無関心の苦痛を強いられるとしたら、それは情況の反映としてのみしか存在していないことを意味するので

はないか。ここにこそ私たちに於ける人情況Vの不在という事態があり、表現の構造内部のねじれをダイナミックに転換させていく表現価値が破壊されているといえるであろう。逆に言えば、人情況Vの不在を再転倒させることに表現の実践的な標準がまず定められなければならないことを示唆しているといえるであろう。

以上のことを、私たちがかかえている現実問題としてあつかえば、先きに学費斗争で認識を変えねばと自覚させられた象徴的な事件に出合ったとふれたことにつながるようになる。それは総体性への認識、つまり、学費や学生存在や大学や社会—国家の認識と、具象的な場を介在したとき強いられる表現とが自己の連続性の内部で連関付けられないということであった。あるいは、想定する大衆と現実の大衆とのくびれであり、対象化された自己像と自己との距離の距離の拡大が無限につづいてゆくことで自己喪失として結果してしまふということであった。このことは私たちにとって深刻なことであつた。何故なら、政治表現が先験的であり、個々の判断が何の脈落もなく恣意的に立てられていることは想像力の死、政治の死を象徴していることになるからだ。つまり、かつて竹内好が日本には思想が不在だ。なぜなら、生活に媒介された思想がないといった、日本における思想のわなにおちいつているという痛覚をもたらしただからである。

このことは先に展開した如く、大衆が階級矛盾をそれ自体として表現する相互関係を形成しえない歴史的现实があり、かつ、知識や論理が自己救済的な対象となつてしかあつかわれてこなかつたという歴史的な伝統に捕縛されて依然として私たちは自由ではないことを意味してしよう。

々の日常の判断（家族問題、卒業問題）が自己にとつても他者にとつても相互に不可避であると、客観的に了解できないことをみればよい。ここでは、想像力が大衆の膨化した非時間の闇につつまれて解体を余儀なくされているのである。

私たちの人情況Vの不在という事態を、現在までの言語の歴史的累積水準に内在的にかかわり、その連続性の内部で突出する、「人間の能動性と受動的苦悩」（マルクス）の弁証的ダイナミズムを表現主体の場としての仮構こそ、まず人情況Vの回復として追求されなければならない。大衆運動の不在という現実にかかわるには、そのようなところでの表現が先行せざるを得ぬことの不可避性こそ、誰れもが自己の現存性を普遍的なものとして取り出さんとするときの現在の不可避な隘路なのである。

6月30日発行

旗

第10号

JUN. 1975

B5版 / 頒価 ¥ 700

政治表現の原理的措置と

経験的総括

立花 薫

日本国家と遺制的共同幻想

三上 治

転形期の思想水路

神津 陽

インフレ批判の基礎理論

坂田 正彦

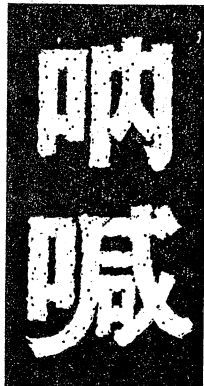
では、私たちが何に向い何を対象にするか、その実践的像を創出していかんとするときどのように始められるべきであるか。

それは、表現として総体的であろうとすること、具象的な場を介在させたとき個別性として屈折を強いられる表現位相の分裂を自己の欠如として自覚し、経験の固有化を通じて固有の表現へと自己組織することである。すなわち、具象的大衆と大衆像との落差こそ、自己表現の不可避的な根拠であり、その落差の死滅に向つた自己表現はその死滅とともに消滅することの根拠を自覚的な表現の組織化として深めることである。

そこに構成される人場Vこそ、主体的情況の甦生として、政治表現が価値にかかわる磁場がある。私たちの唯一の武器は、戦後社会の構造総体の描象とヴィジョンであり、その武器が現実関係のなかで不断に検証を強いられる関係の創出が条件である。だが現在、主体の内部では武器を客観的・歴史的な位相で指定できず、かつ現実関係を喪失して、個々の判断は恣意的なものとして他者をこぼんでいるような状況である。私たちはこのような状況に深くこだわらなければならない。何故なら、ここに未来からも現在からも二重に疎外されている大衆の非時間的な土俗的な構造が自己の内部にわりこんできているからだ。そして逆に、わりこませるように現実関係を止揚する方途を意志的に仮構することで、大衆の沈黙が言語的意味になるまで追いつめねばならないだろう。

戦後の政治的學生運動は終焉した。今や、尖端—土俗に掛る膨大な関係の構造総体をあつかうことなしには、個別的であることで普遍につながる回路を構想することはできない。個々のな社会に向けた表現が何ら共通の前提にならえないことを注目せよ。これは個

反帝戦線機関紙 第3号



B5版94頁
頒価500円
3月8日発行

I 部

- (1) 戦後のなるもの彼方へ
— 山田 希 —
- (2) 労働疎外と生活的現実の位相
— 斎藤 進治 —
- (3) 過渡期における共同観念としての労働者運動
— 神岡 誠 —
- (4) 戦域・組合・理念
— 高田 登 —
- (5) 春闘をめぐる情勢と問題点
— 有馬 真 —

II 部

- (1) 国家公務員労働者運動の（自立）の方途
74春闘結果と展望
— 有馬 真 —
- (2) 個別闘争が越えるべき思想的鞍部は何か
光文社闘争に関して
— 畦倉 恭 —
- (3) 中公開争の課題とは何か
— 矢島一太郎 —
- (4) S工高不当解雇撤回闘争報告
— 大刀川 守 —
- (5) 制度と化した日教組を解体し学校教育幻想を撃つ
— 村上きよし —
- (6) 福祉労働者のスト権問題
— 荒岡 修 —
- (7) 地方自治体の財政危機、人件費攻撃をいかに闘うか
— 龍太 —
- (8) 横浜港よりの報告
— 西山 英生 —

発行 / 全国反帝戦線連合

全国反帝戦線連合機関誌「吶喊4号」を、全国の闘う同志諸君、友人諸兄弟にお届けする。昨冬の2号から、今春の3号発行、そして今回の4号というテンポは、当初よりの私達が意図してきた「吶喊」の季刊体制の定着という目論見を一応満たしているといえる。内部通信として誕生してきた「吶喊」のこの様な「構成」への転移は、時代的には情況における政治的、社会的な表現自体が蒙っている「結果」である側面と、私達の「意志的」な選択が錯合したものである。それ故に、ある論文は、個別闘争へのかかわりから、その帯域総体を概念的に把握する様な理論域への踏み込みを意図しているかと思えば、他の論文は、関係△場▽の現存的な構造に突入している、といった△構成▽の位相差を不可避としているといえる。

たゞ、これらの問題点については、いくつかの整理が可能であることは確かだと考えられる。幻想を媒介に現実を見、現実的行動をなすという政治運動の展開サイクルと、身体的行動によって幻想を産み出すという大衆運動の展開サイクルが、意志的な△表現▽域の覚醒を促がすことを通してわたしたちの存在が歴史的・現存的な基盤の上にたっている位相と人間の感性的諸活動の歴史的累積（連続性）の下で生きている位相との△関係づけ▽や△了解づけ▽の内部に喰い込む以外には「革命運動」や「階級闘争」の細い道筋はつけられないという反省にもとづいているからである。

その意味で、より「実践」的な領域での政治△表現▽というわたしたちの「選択」は、ある位相では「実践」をどこまでも逸脱するよるな感と、「実践」をどこまでも社会の局処に於ける「関係の修羅場」の現象的な展開にわずかにつなぎとめる感の二重の径程を受容せざるを得ない。しかし、依然として社会的幻想の表出と時代の幻想の共同性との架橋の構造に「政治」過程が存在しているという基底は手離すことは出来ないし、そこが私達の本源的な△表現▽の基底であり、その△表現▽に不可避に参加してくる国家や社会の現実的展開の度合が実践の△場▽であることは忘れてはならないのである。

戦后国家の変容とインフレーションに象徴される高度な工業社会が産み出した展開は、△戦后政治運動▽と△戦后社会運動▽の牧歌性を、全面的に吹きとばしてしまった。復古的な△反動▽と、体験的な△復古▽が乳くり合う△政治▽的日常とその水圧に抗して闘うことが、どの様な△革命運動▽のプログラムに結びつくのかは依然として△未知▽の領域を含んでいるとしても、私達は、それを無視することによって私達の△世界▽を構築することは出来ない。なぜならば、最底見積っても、それが情況の不可避な結果であるという位相で、私達と△現実▽が深く関っているからである。

最後に、本号の編集について若干触れておきたい。当初の予定としては東〇反帝戦線情宣機関誌「行動者」と、明学大反帝戦線情宣機関誌「全世界を獲得するために」、中大反帝戦線情宣機関誌「戦士」を資料として所収するつもりであった。しかし、編集段階での多忙と印刷事情によって割愛せざるを得なかった。これらの資料を要望の方は直接大学班か、各地区の事務所と連絡をされたい。また「喊」は8月全国大会に向けて、特別号として発行することを決定している。最後にどの様な批判も公開的・開明的であれば私達は責任をもつて答えてゆきたいと考えていることを付け加えておく。

一九七五年 初夏

全国反帝戦線連合

反帝戦線機関紙 一第2号一

呐喊 B5版 110頁
頒価 500円
12月20日発行

I 部

- (1) 〈出版系労働争議〉の普遍的
課題とは何か
- (2) 組合日常性のうちに新たな〈原則〉を
—K職場闘争報告—
- (3) 教育社闘争に於ける経験的・中間総括
- (4) 労働者運動への政治的関与の準位
—畔倉 恭—

II 部

- (1) 立教大学学費闘争報告
- (2) 知的過程の変質と自立
—沢田俊—
- (3) 大学共同幻想の転位と変質の構造

III 部

- (1) 政治表現の連続性を確保せよ!
—全国反帝戦線連合—
- (2) 朝鮮・アジア民衆の苦闘と
如何に連帯しうるか
- (3) 部落解放闘争への我々の見解
- (4) 先端—土着国家思想への
批判的戦闘へ
(寄稿) —神津 陽—

発行 / 全国反帝戦線連合

呐喊 第4号

400円

発行日 1975年6月30日
編集人 関口節夫
発行人 全国反帝戦線連合
発行所 新宿区百人町2-16-18
小林ビル105号 希望社
電話 03(368)4630

蒼氓社 新宿区百人町1-11-31
斉藤ビル504号 03(362)0149
関西支社 06(451)4803
でも取り扱います。

頒価 400円